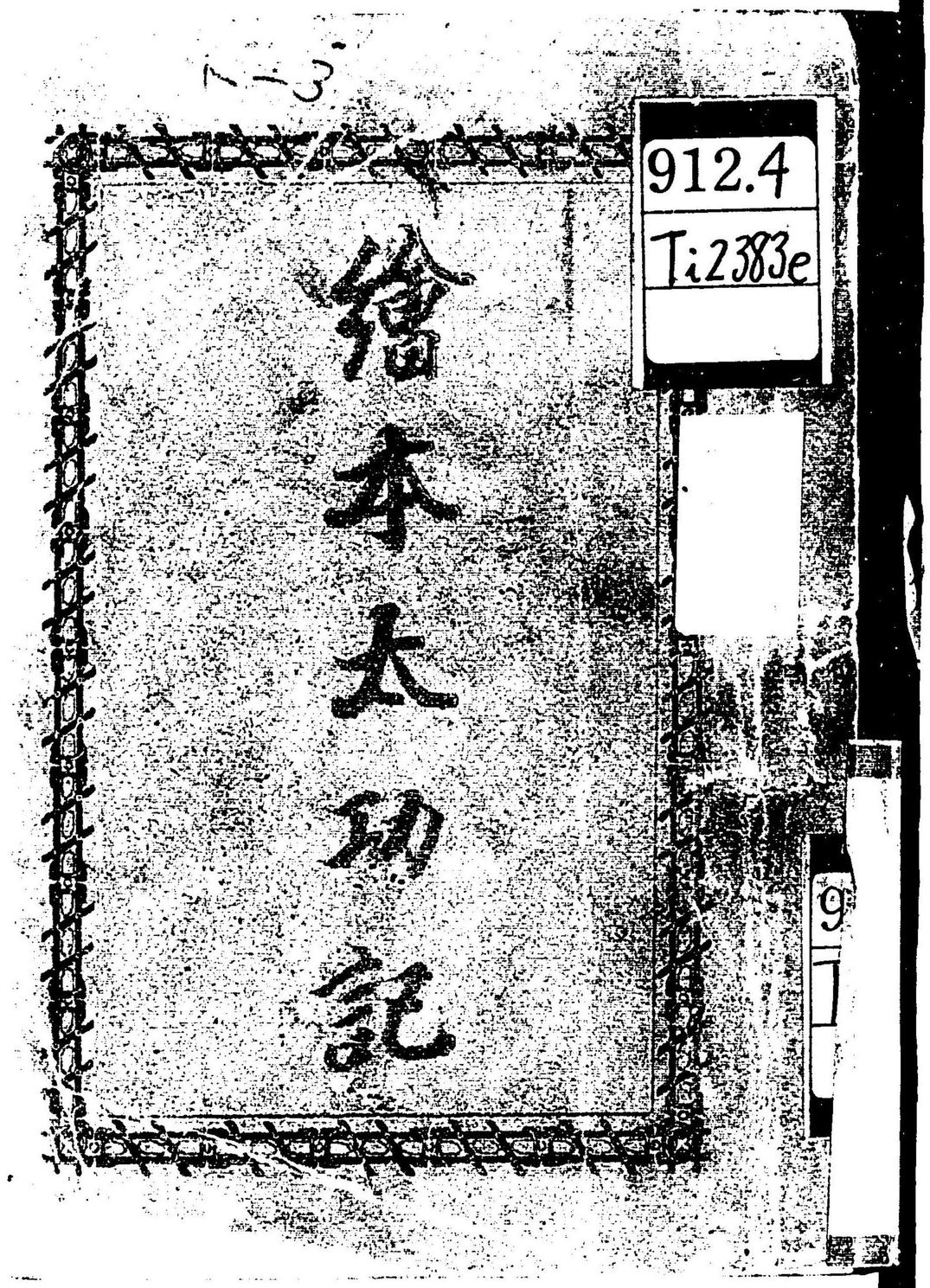


912.4
Ti2383e

K一3表
912.4-Tu2383-1

繪本太功記

作者　近松やなぎ
近松湖水軒
千葉軒

○發端

天にかなひしもゑやらん八百の諸侯從ひて紂王を討んといひしを我未だ天命をしらずとて諸の軍を引き具し先かへりぬ、實戰國に大勇をしめす亂舞の音たかき内大臣春長公の一構へ遠近の諸士大半屬し登城は櫛の齒を引くごとくさも嚴重に見へにけり、取次の侍罷出、詞「仰付られし安部の法印只今參着仕ると申上ぐれば近習の面々斯と取次ぐ間もなく内大臣平の春長、從ふ武士は羽翼の臣眞柴筑前守久吉武智光秀諸共に椽際近く座に直る、久吉下部に打向ひ、詞「ハ、君にもことのふお待かね、早く案内申せよと、いふ間程なく法印安部氏道都の水清く、よどまぬ公家の交りに衣紋正しく入

來る、春長莞爾と打笑給ひ、詞「ホ、法印には大儀〳〵、其方を召し寄せしは餘の儀にあらず、あれ成大庭の蘇鐵泉州妙國寺に有しを、此安土に植ゑ度く所に、頻りに聲を發し妙國寺へ歸らん、歸せ〳〵と震動する事三夜に及ぶ、正しく變化の所爲ならん判斷いかにと有ければ、始終を聞入る内より理を考へる道々の、胸の算木に眉をしはめ、詞「ハア御尤成る御尋其考申せしに、草木心なしとは申せ共、佛地に育ち朝夕妙經を聞込み、一度枯し木なれども、元の如くさかへしも法花經の德あらずや、法力の尊さは御宗旨の有がたき所なれば君にも御滿足ならん、急ぎ佛地へ送りかへしたまはるが肝要ならんと法印が水を流せる辨舌は實晴明の末孫の器量顯はれ見へにける、血氣の大將道理にせまり、詞「春長が手に入れし蘇鐵返すべたいはれなし暫らく妙國寺へ預ける旨、使者を以て申遣し身が心に叶はざる法花の族いはれざる宗論を好み、上を恐れざる無禮の段々、牢獄へ押込置たり、

て然るべからん、久吉には能呀なき樣もてなすべし、はつと傾掌式禮目禮異柴に隨ひ法印は次の一間へ立て行、程もあらせず下部共、普天坊を高手小手庭上に引すゑれば、光秀は普天に向ひ、詞「ハア貴僧、かゝる警しめにあふ事も、法義故とは云ひながら、獄の苦しみ察しやる君にも是に御座ましませばしさつて出牢の御願ひ致されてよからんと、普天をかばふ明智が詞、尾田殿くわつと怒の面、詞「ヤア某が詞も出さぬ内、出牢の願ひせよとはいらざる汝がひいきの沙汰扣へて居よと居高丈、イヤねぐさり坊主よつく聞け、此度妙國寺の庭木の蘇鐵、某所望し此安土へ植置きたる所、むせうに妙國寺へ歸らんとはゆる、餘りかしましきによつて、暫く彼地に預ける間佛木たり共春長所望の上は、再び返すにあらず夫らを番人に申付る間、其旨急度心得られよと、冥途の高祖へ申達せよ不承知ならば直樣に、普天を以て冥途より返答有べし、儕も法花の妙をしらば二度此土へ立歸り、某に詞をかはせよ、最早左樣なる法力は有まい〳〵一時も早く使を急がせよ、

早く、〳〵と不敵の春長、重惡つのる權威の仰てらへ〳〵し普天坊、すつと寄て齒がみをなし、詞「ヤアぬかしたり嘲つたり、汝が宗門で有ながら高祖をかろじ奉り、惡口雜言報ひ忽遠かるまじ、愚僧只今命を滅するも汝が使に行にあらず焰魔の廳へ赴儕が惡逆訴人の爲に此世を去る、見よ〳〵頓て火の車を持せ、拙者迎ひに來るべし、ヤア一時も早く冥途の門出急ぎたし、

光秀殿介錯と晉る普天を光秀がはつたとにらみ、詞「ヤア我君に詞をかへし惡言を吐手間で、なぜ助命の願ひは致さぬ、恐ながら我君にも御怒りをしづめられ、御助命の程偏に願ひ奉る、元來勇猛盛んにして、良もすれば靈場佛地を破却したまふ事、君の一失山門の衆徒等も、急難を遣れんと一七日の加持祈禱惡逆の勇將と、世の人口默止がたし、只仁惠の御計ひ偏へに願ひ奉つると、事を分けたる光秀が、詞に春長突立上りだまれ光秀、詞「我惡逆とは憎さ過言赦されずと拳振上明智が頭りう〳〵、打すへたまへど手向ひの、あらぬも主命ハッはつと誤より入たる無念の涙普天坊も怒りの顏色、詞「ヤア惡鬼魔王と云は汝が事、君有て臣、臣有て君たる事を知らず、情なくも大國の主たる、光秀殿を、童おとりにうち打擲天罰佛罰一時に報ひ墮獄にくだしくれんずと、怒り重ぬる額の天弓、光々として日運の、出現有りと、身もよだつ、ヤア〳〵物ないはせそ早くも國境へ引立よと御下知恐れ家來共、はつと斗に引繩の、頓て恨をしらさんと題目の聲一心に、佛敵春長赦さじと詞は正に本能寺御法の庭に露となす、佛の報ひ宗門の威力の程こそ

○六月朔日の段

扨も其後天正十年六月上旬の事かとよ、内大臣平の春長、東北に猛威をふるひ押て都に上落有る、御嫡男城之助春忠二條の御所に居をしめ給ひ、天奏御沓を入給へば饗應の役人は武智日向守光秀、森の蘭丸初めとし、諸代の良臣古老の諸士列をして相詰る御所の内勅浪花中納言兼冬仰出さるゝは詞「往昔應仁の亂れより、諸國の逆賊王威を輕んじ、都の内へ軍馬を引

入玉座近く馬蹄に穢し叡慮穏ならざりしに、幸春長大志をいだき、帝都を無事に治むる條、主上叡感浅からず、其功を賞し給ひ嫡子城之助春忠を従三位に叙し左中將に任せらる院の内勅、斯の通りと有ければ、春長はつと平伏有コハ有がたき勅命、詞「不肖の某、なんぞ一臂の力に及ばん、三好を初め逆徒原、四方に退散いたせしも君の聖德數ならぬ忰春忠身に餘つたる官位昇進、天恩謝するに詞なしと、勅答有れば兼冬卿やゝ滿足の御氣色、春長重ねて軍務に暇なき某、心斗の御響應、鄙びたる觀世能御上覽も時の興イザ奥殿へと有ければ袖かき合せ兼冬卿、武智が案内にしづ〳〵と、奥の間さして入給ふ、春長跡を見送つて、蘭丸是へと近く召れ、詞「汝も兼て知る通り、無二の忠士と思ひの外、心得がたき光秀が心中、彼が心を探らん爲いつぞや寺において諸侯の見る前、恥辱をあたへ恥しむれど面に怒りを顯はさず、無念を忍ぶ彼が胸中、猶以て不審の一つ、其儘にさし置ば、虎の子を飼に同じ逆心の企有や虚實を探りためし見よと、仰に蘭丸さん候、詞「武智が行跡聊不審に存る折から、割符を合す君の御心思ひ合する彼が俗性頭上に喜怒骨有者は主人にたゝるると異人の禁め、もし逆心に極まらば、討て捨んに手間障入らず、奥へ踏込引とらへヤレ麁忽也蘭丸、實否も糺さずあら立なば、返つてひが事出來せん、事によそへてナ合點か、ハヽア畏り奉る必油斷いたすなと、示し合して春長公、帳臺深く入給ふ、蘭丸は只一人、両手をくんで思案顔、工夫をこらす折も折奥は、亂舞の打囃子、二番三番ワキ能も終りと見へて配膳の時刻も移る、巳の上刻、武智が一子重次郎、古實を守る饗應司、配膳のかけ盤山海の珍味美をつくし、目八分に捧げ來る蘭丸見るより詞「コレヤ重次郎先待れよ、饗應の役目は、お手前の親父、光秀殿と此蘭丸、両人立合申合せも有べきを、自分一人の取計らひ、此蘭丸は呑込ぬ膳部の次第は、いかゝでござるハテ、御料理い板元奉行中井半左衛門七五三の猶立ナニ七五三、ハテナア何にもせよ、相役の某に一應の咎へもなく氣儘成る致し方近頃以てぶしつけ千萬、此分では差置れず、光秀殿へ直應對

役所へとかけ行向ふ、淡ぐわらりと出來る武智、闌丸傍へぐつと詰寄、詞「樣子殘らず、聞れしな、武士は禮義を表とするに、此闌丸を踏付し仕方いか成振意か言へ聞ん、返答次第手は見せぬときつぱ廻せば、こゝ仰々しや闌丸追若氣の一徹何故貴殿を侮り申さん、最早御膳の時刻故、役目大事と勸る光秀、だまり召され、饗應の役、貴殿拙者に相勤めよとは主人の云付主命をもどき、自分の氣儘にせらるゝはさ、聞へた、こりや何か、拙者を役に立ずと思し召すか、但し又た智惠者と呼れし武智殿、人を見下す高慢か人も知れる其元の素性、何か浪人のよるべなく、所々方々をうろたへ廻り、北國において詮方なく、粮に盡たる身のせつなさ、土民どもの小悴を集め、手跡指南の禮物で、命をつなぐ寺子やのお師匠樣、ふゝゝまだ有、日外、江州佐々木征伐の折から、此下と先手を爭ひ、筭作和田山時限の合戰久吉に仕負ても、恥を恥共思はぬ其元、何と、そふでは ござらぬかと、心に思はぬ傍若無人、さしもの光秀くわとせざ上、詞「ヤア物に狂ふか闌丸、大切の場所と事を慎み、云せて置けば法外千萬、今一言云つて見よ、舌の根を切下んず、ならば手柄に切て見よ、ずく切て見せふ、サア〳〵と兩方が互に詰寄詰より、既に斯よと見へたる所、魂あらはに春長飛かゝつて光秀が襟がみつかんでどうと捻付、詞「やをれ光秀凡武家の格式は、古實を以て式法を用る、過たるは猶及ばざるにしかじとは、古人の詞、院の内使も重けれど、皆それ〳〵の例法あり中納言殿饗應の膳部、金銀の瓶器を用ひ、七寶を芥のごとくちりばめ、法外奔走此後、主上仙洞の行幸には、何を以てか饗應に叶いんや、其上闌丸が申は我詞も同然なるに、異變致す慮外者、頬ぶて闌丸、ハア早くぶて、ハア〳〵御上意なりと闌丸が腰の鐵扇振上て眉間眞向續打くい入要に血は瀧津瀨、是はとかけ寄重次郎膝にかためて引敷光秀、流る血汐諸共に眼血走る、無念の顏色春長、つく〳〵打守り、詞「〳〵かに光秀今闌丸が手を以て春長が折檻、口惜ふは思はぬかと、底意を探る大將の、詞に光秀居直つて、詞「コハ仰共覺へず數ならね共武智光秀、君に捧げし我命

骨はひしがれ身はずだ〳〵に成迚も、大恩有御主人をお恨申さん樣はなし左は去ながら世の人口、春長こそ鬼の再來、情をしらぬ大將と譏りを殘したまはん事、末代迄の家の瑕瑾舊惡を惜む御性質、諸士の恨は小車のついに御身に報ふといふ、御心の付ざるは〳〵、淺ましや悲しやあァ御心をひるがへされ流石仁義の大將と、呼れ給はれ我君と、或は怒り、或は歎き、五臟をしぼる血の涙、思ひは千々に重次郎父の心を察しやり、齒をくいしばる忍び泣心ゞ思ひやられたり、金言耳に逆立つ大將、猶も怒りの聲あらゝか、詞「ヤァいはれぬ諫言、推參至極、目通り叶はぬ立てうせう、ソレ〳〵園九武智光秀親子の者、門外へ引出させ、早く〳〵と烈しき下知、はつと、領掌園九が猶豫はいかにとゞめ付られ、無念重なる光秀が、我子を引立出て行、底意は誰かしら浪の、萬里に羽打つ大鵬や面目涙重次郎身はしよげ鳥の片羽がい、父の心はしらにぎて、神も佛もなき世かと、身をかこちたる忍び音の、胸はくら闇五月やみ、詮方涙諸共に御門の外へと出て行、名にしおふ花の都を隣して、時に近江の本城を跡に見おろして今爰に、暇の舍りの上屋敷千本通りに一揆へ、日向守光秀が出仕の留主は操の方、夫子の武運長久を、神に祈をかけまくも、手づから備ふる神酒供物殊勝に見へて爪はづれ流石は武家の奥床し、折から次の襖を開らき、出來る武士は武智が組下九野豐後守、年も五十の分別盛り、操が前に兩手を突き、詞「先以て今日は、林鐘の初日、大内にても氷室の節會、殊更太守光秀公大公義より饗應司の大役仰付られ、御家の眉目我々迄大慶至極、と述ければ操の方取敢あへず、詞「夫光秀重次郎諸共未明よりの御登城、殊に大事はけふのお役目、常々短氣の春長樣、生れ付た夫の一徹、何の障りもない樣と案じるは女の常、悲しい時の神佛と手づからのお備へ物、詞「是は〳〵、イヤもふ萬事抜目おき光秀公、追つ付け吉左右上首尾と挨拶取々なる所へ、殿樣の御下城と、しらせの聲に妻操我子の乙壽諸共に豐後守も座を改め、待間程なく武智日向守光秀、常にかはりし其面色、豐ざはりも荒々しく、不興の体に立歸れば、

跡に隨ひ重次郎、しは〳〵として座に直る、夫の顏色額の疵、心ならずと操の方、光秀の傍近く申我夫、詞「いつにないお顏持、お氣もじ惡ふはござりませぬかお怪我でもなされたか、どうやら氣が〻り胸騷ぎ心が〻りと尋ぬれどとかふいらへもせぬ夫重次郎顏ふり上、詞「今日二條の館にて饗應司を勤むる所、日頃不和なる森の蘭丸、我々へ樣々の惡口雜言それのみならず、春長樣以ての外の御怒りにて、蘭丸に仰付けられ、アレあの通り、父上の眉間へ疵の付程に、殿中でのうち打擲目通へはかなはぬと、警固の武士に追立られ、無念ながらもおめ〳〵と、顏押し拭ひ歸りしと、云ひ〳〵滴す口惜涙、聞より妻〻ハアはつと胸を貫く釘かすがい豐後も俱に拳を握り咬牙齒ぎしみ無念の涙、樣子立聞四方天、ものをも云ず表の方、かけ出す裾をしつかと留、詞「事をせいたる汝か顏色、仔細ぞあらんといはせも立さヤ愚なり豐後守主人へ耻辱をあたへし素丁稚の蘭丸め素頭引拔立歸る妨げするなとふりはどき行んとするを猶も引き留、詞「イヽヤ其憤りは鹿忽〳〵、汝が不骨は主人の誤り、返つてれ家の仇とならん、先づ待たれよとさゝゐる丸野、シヤ面倒なと勇氣の田島、放せ放さぬ二人が爭ひ、光秀聲かけヤレ待て兩人、詞「身が詞も出さぬ内立騷いで見ぐるしいしづまれやつとせいすれば物にこらへぬ田島の頭、武智が前にぐりと詰かけ、詞「縱誤り有るにもせよ丹州近江兩國の太守、殿中での打擲は、我々も俱に耻辱、頗耻をさらさんより、蘭丸めを打て捨、かなはぬ時は生害と覺悟極めし四方天、さなせお留なさるゝな、ヤア愚〳〵光秀を打たるは私ならぬ主命、スリヤ蘭丸に遺恨はない元來短慮の御大將、心にかなへは飽迄寵愛、又かなはねば打々擲、縱命を召さるゝ共、君に捧げし我一命、ちつも共惜まずいとはぬ某、我存念もしらずして息筋はつて尾籠のふる舞、しづまれすされとねめ付る、道理に道荒者が、行も行かれず立たり居たり勇氣も、たゞみ猶豫ふ内、詞「御上使の御入と下部が聲、光秀不審の眉を皺め、詞「ハテ心得ず思ひがけなき上使とは何にもせよ、女房忰は次へ立、早く〳〵と追立やり、威儀繕ふて出迎ふ案内に

つれてのつさ〳〵、役目を功に肩肘はり、頬も眞赤赤山與三兵衛上座に、むんずと押直り、詞「上意の趣餘の儀に有ず、先達て眞柴久吉、郡三家を退治の爲中國へ馳向ふ、急ぎ光秀加勢として、西國へ下り久吉の幕下に屬し戰功を勵むべし、其功勞によつて、出雲石見の兩國給はるべき間、今迄下し給はる丹州近江二ヶ國は召上らるゝ旨、城代へ申渡し急ぎ城を明渡すべしとの嚴命也といふに人々二度恟り、主從顏を見合せて暫し詞も口籠る物に動せぬ光秀は禮儀正しく上使に向ひ、詞「ハテ台命の趣委細承知仕る直線是より西國下向、城明け渡しの用意萬端、家中の諸士へも申渡さん、ホヽ、早速の領掌神妙〳〵、一刻の延引n一刻の不忠となる、出陣やら宿がへやらがらくた道具片付て、早〳〵城を渡し召れ、役目は是迄おさらばと、にくてい目禮取まぜて、眞綿に針の青蟲、蹴立てこそは立歸る、一微短慮の田島の頭、詞「コレッタ御主人、今赤山が上意の次第、前後揃はぬ詞の端〳〵、西國加勢と披露して實は御身を改易し、自滅をさせんず春長が姦計、良禽は木を見て栖不仁非道の尾田春長、義理も忠義も是限り、西伯姫昌は殷を討ち、ついに天下を治めし例、破鏡再び照さぬ道理、今目前に顯はれたり、今隨臣の空虛をかんがへ、一時に尾田を討亡し、天下に溺たる功を上、名を千歳にとゝめんは、サヽこいかに〳〵とせき立田島、やゝ默然たる日向守始終こなたに立聞操、襖あらはに走り出、夫の傍へさし寄つて忠義一途の田島の頭、さら〳〵無理とは思はねど、勿体ない我君を殺して四海を奪ふとは聞もうるさい穢らはしい、罪は目前美濃尾張主を殺して一日も、安穩ならぬ天の責お年寄れし母御樣、いとし可愛子供迄俱に惡名とらするが、それが本意か情ない妻子不便と思すなら、御身全ふ月と日の、くもらぬ鏡武士の、操を立て給はれと、わつ〳〵くどいつ理をせめて夫を思ふ眞心の思ひは千筋百筋の苧綛を亂す憂涙、といゝめかねてゞ見へにける、元來仁義の豐後守、光秀に打向ひ、詞「文武二道の我君にれ諫め申すは憚りなれ共、和漢の書籍に記せし通り反逆謀反の輩が本意を達せし例しはなし、世に秀た

る光秀公高木風の俗語にひとしく、皆佞人のなす所、時節を待て誤りなき申開きの手段はさま〳〵、上使に立し赤山と君が五音を考ふるに水火既濟の卦に當つて、西施國を傾くる不吉の占、一旦勝利有といへ共日おらずして災生じ終に全からざる前表只幾重にも思ひとゞまり下されよと、事を分けたる諫の詞、いへ共とかくの返答なく、詞「ハヽ、心なき人は何ともいはゞいへ、身をもおしまじ名をもおしまず、ヱヽいよ〳〵御謀叛の思し立でござるよなと、いはせもあへず豊後か首討てかたむる、謀反の首途、詞「ハヽ、適々、此上は軍の手配、いで出陣の用意をせよ、ハア所存の程こそ

◎同二日の段

詞「何と三助暑くてこたへられぬぢやないかい、ヲヽ此下郎には何が成る、朝とくから手桶の切り水、くれ方も又此様に汗水に成てのはき掃除、おらも後の世には大將に生れてくべいと思ふが、どふであらうなあ、されば此本能寺を假殿にしてござる春長様は、前生は鬼だと云ば、奴が大將にならぬ事も有まいはさといへば、傍から珍内が、詞「ハテ扨二人ながら何をいふかい、死での先は片便、奴から大將に生ながらなられた眞柴殿、それを知りつゝ、ほんにやれ〳〵來芝の事は由男にして、山村程今をため、里虹者じやといはるゝ市紅が肝心だと、どつと笑ひの折こそあれ、コリヤくあれに見る御先供、なむ三春忠様の御入だと猫に鼠と奴共、おのが部屋へと逃て入程なく近付く鉄乘物、數多の武士が前後をかこい、築地御門に昇すのればかくとしらせに森の蘭丸、禮義正しく出向ひ、詞「阿野の御局御苦勞に存じ奉ると、詞の内に乘物の戸を開かせて阿野の局、三法師君を抱まいらせ、しづ〳〵と立出、春忠様の御名代と此君の御入故、祖父君春長公より御迎ひとして、自がもりまして參りしに、殊のふ御きげんもよろしく、お嬉しう存じまするとのたまひければ、詞「ホヽ、りれは一段さぞ祖父君にもお待かねいざさせ、給へと蘭丸が、案内につれて付々も門内さして入にけり、鹿の音むしの音もかれ〳〵の契り、あらよしなや、形見の扇より〳〵、猶うら表

有物は、人心なりけるぞや、あふぎとは空言やあはでぞこひはそふ物を〳〵

詞「局が一曲出來た〳〵、倅春忠が名代孫殿へ御馳走に、何と面白いか、さつげ〳〵と大盃、はつと心得しのぶがお酌、詞「蘭丸へさす所なれ共、阿野の局が舞の一手勞を謝する其爲に局へ盃さし申す是は〳〵ふつゝかなる一と奏御意に叶ふて此上もなき身の冥功といひつゝ局は御盃、少し引受差置ば、春長公笑壺に入、詞「ナニ蘭丸局が間を仕れと重き御諚も詔なく、詞「仰に候へ共一滴も及ばぬ某、此義は偏に御高免を、扨呑ぬ所を呑すが興、肴は汝が望次第、すりや御肴を下されふとな、ホ、六十餘州を手に握る此春長さ、何なり御望め〳〵、ハア然らば何とぞ此蘭丸に軍勢を四五千斗下し玉はらば有がたからんと相述れば、ム、心得ぬ汝が望もし軍勢をあたへおば、さん候丹州龜山へ押寄、只一戰に光秀が首討取て君の災をさけ申さん、成程尤なる願ひなれ共、いらざる心配無用〳〵、左樣な事に骨折ずと、早く一盞を傾けて、暑を凌ぐが身の養生飛立斗り有明の、よる雲となき樂しみのヒ

詞「榮花にも榮耀にも、此春長には及ばぬ〳〵、我君の御詞に偽なし、土の無念を散せんと一度は謀叛の旗を上、窮鼠返つて御身の大事、道は若氣、北國には柴田勝家西國には眞柴久吉、龍に翼の尾田春長、君の御諚は去事ながら蘭丸殿の詞の如く油斷大敵、ハテ局迄が同し樣にいらざる此場の長詮議、御客人が嘸ふら〳〵眠り、身もはつと退屈一睡の夢の間の契りはいざと戯れて、座を立給へば阿の、局若君誘ひしづ〳〵と帳臺、深く入給ふ、跡にうつとり蘭丸が、心一つにとつ置つ、思ひは同じ女氣の人目しのぶが寄り添て、詞「申蘭丸樣、もふ何時でござりませふな、これはしのぶ殿そもじはまだ奥へ行かず、ハテ扨それは不埒千萬、御用もあらん早奥へと、いふ顏じつと、打詠、詞「ほんにまあ女の心と男とはそれ程迄違ふものか、兄齋藤藏之助殿にお賴申て、春長樣の奥勤も、あなたのれ傍に居たいばつかり今更い恥も恥かしながら、去年の初春洛東の、地主の、れ庭の花盛り蝶共に誘はれ願ひかけまく初戀の、色も香も有殿御ぶり、觀音樣のお

仲立、互の胸の下帶も、とけて嬉しい新枕かはるまいぞのね詞が直ぐに心の誓紙ぞと、片時忘れぬ女房がお傍に居るがたいやならいつそ手にかけ給はれと、ぴんとすね木の糸櫻、花も亂るゝ風情也、さしもに猛き蘭丸も心の外の曲者に、取ひしがれて背撫さすり、詞「イヤもふ何事なふ申せしがお氣にさわらば眞平〳〵、百萬の强敵にもびくともせぬ某が、斯の通りと手をつけば、詞「ヤ、又人をじゆつながらすのかいなァ春長樣も大方に、班女が閨のお睦言、お局樣の取揖で出船の相伴、サアござんせと手を取れば、詞「ハテ扨たしなみや、人目を忍ぶ二人が中、殊に今宵は君の宿直又の首尾をとふり切を無理に引立奥の間へ入やいるさの月かげに、しのぶの亂れ、亂れあふわりなき夢や結ぶらん、早更渡る、夏の夜の、そよ吹く風も物すごく、寐られぬ儘に御大將、手づから障子押ひらき、何心なく茂みの方見やりたまへばさは〳〵と驚かさはく塒の烏、詞「ハテいぶかしや、まだ明やらぬ夏の夜に遠音はひゞく鐘の聲、未だ明け

馬の物音、宿直の者はあらざるか、急ぎ物見を仕れと、仰の下より阿野の局長刀かい込走り出、詞「君の大事に候ぞや、蘭丸殿は何所に有早く物見を致されよ、わらはも俱にと表の方、呼はり〳〵かけり行聞に蘭丸一間より飛で出れば春長聲かけ〳〵蘭丸、反逆有と覺へたり、急ぎ物見を仕れと、上意にはつと蘭丸は振返り見る廊下の高欄、是幸の物見ぞといふより早くかけ上り、四方を急度打見やり、物のあいろはわからねど、此本能寺を心ざし押寄るは、察する所武智光秀、スリヤ光秀が反逆とな今てこそ後悔汝が諫、聞入ざるも傾く運命、只此上は防ぎの用意、ハア委細承知仕る、が縱一致に防ぐとも院内わづか三百餘人、思へは〳〵主君と俱に、蘭丸我君樣、チエ口惜やと主從が怒りの齒がみ逆立髮、無念涙の折からに、表の方より森の力丸、廣庭に大息つぎ、詞「御油斷有な兄者人、武智光秀我君に、多年の恨を散せんと、手勢すぐつて四千餘騎、左馬五郎を始とし、或い齋藤藏之助築

地間近く押寄せて候と、いふ間もあらず闇丸は、其儘ひらりと飛れかて、詞「我君には恐れながら防ぎ矢の御用意有て然るべし、イザ某がかしこに向ひ一當あて、眠りを覺さん、力丸來れと兄弟は飛がごとくにかけり行跡打見やり春長公、此上は防ぎの一矢、先差當つて一大事は三法師、詞「ヤア〳〵宗祇若をいざなひ早く〳〵、御諚の下にかひ〳〵しく、しのぶ諸とも茶道の宗祇若君いだき參らせて足もわな〳〵胴ぶるひ、しのぶも俱にうろ付所へ、多勢を切拔阿野の局、其身は數ヶ所の痛手あがら、血に染長刀かい込で心も強に立戻り、詞「申〳〵我君樣、最早敵は込入て候へば、君に替つて一ど軍御身を遁れ下さるべしと、口にはいへど御名殘、涙彌增計也、詞「ヤア愚かお ろかなるなか身を遁れんと返つて名もなきやつ原に、首を渡さば死後の耻辱、汝は我に成りかはり宗祇引連れ三法師を何とぞ守護し落延びて、此旗諸共久吉が手に渡し、我存念を晴させよ、猶豫へ返つて不忠の至りと、仰

此儘落られふ、此義はお赦し下さりませ、これを思へば自らが、胃の酒宴の其時に班女が閨のかこち言、其一さしのあふぎとは、別れを告るしらせかと思ひ廻せばいとゞ猶、悲しいわいのとどふと伏歎沈めばお道理と心をくんで諸袖をしぼるしのぶが俱涙、泣音をそゆる計也、數多の切首片手に引さげ庭先へ、立歸つたる森の蘭丸、それと見るより春長公、詞「今に始ぬ汝が働、シテ樣子はいかに〳〵、されば候、二條の御所へは武智光安立向ひ當手の寄せ手は左馬五郎光俊、采配取てきびしき下知、なれども、味方は必死の勇者、御覽の如く首討取一泡吹せ候へども、始終の勝利は、成程〳〵、只此上は潔く、死出三途も主從俱に、サア今聞通り我覺悟、早く此場を落延ぬか、但し三世の縁切ふや、サア其義はなア縁切が悲しくば、一時も早く落延よコレお局君の先途を見屆くるは此蘭丸、片時も急ぎ裏門より、宗祇坊は何をうつかり、ナット合點、イヤもふ最前から落たふて〳〵氣は上つり、コレ〳〵しのぶ殿もれ供の用意といへど道に忍び夫、言たい事も面伏せしほれ、泣〳〵立

上れば、蘭丸聲掛、詞「しのぶは君の御供かないぬと聞て悔り驚くしのぶ、詞「ヱ、そりや何故、ホ、汝にお咎なけれども、汝が兄齋藤倉之助光秀に一味の返逆、敵の末は根を斷て葉を枯す、命を助け其儘歸すはこれ迄、サア是迄君への宮仕と明て云はねど妹と背の、中を隔の垣となる、しのぶが憂身詮方も涙ながらに用意の懷劍、咽にがばと突立れば、コヽ何故と驚く人々大將春長感ト給ひ、ホ、女ながらも適の生害、兄とひとつでない潔白、今日只今春長が仲人し蘭丸が宿の妻、心殘さず成佛せよと、仰に手負蘭丸も、はつと計に有がた涙顏に紅葉のからくれない血汐に染る両の手を合すも二世の名殘ぞと物いひなげに夫の方、御大將をふし拜み、笑顏を娑婆の置き土產、あへなく息はたへにけり、歎をよそに御大將、勇を付んとヤア〳〵蘭丸、詞「我い是にて討手を引受、此場を去らず討死せん、汝は是より馳向ひ、敵のやつ原一泡吹せ、名を萬天に輝かせよと勇め給へば、詞「ハア〳〵、仰にや及ぶべきたとへ光秀、何萬騎にて寄する、片はしなどもで切まくり立、君の御供仕ら、

ん早おさらばと立上れば、涙を拭ひ宗祇坊、局をいさめすゝむれば、せひも涙に袖の浪、たゞよひ、ながら若君を、宗祇が脊にしつかりと、之ぞあふぎの憂別れ見かへる名殘、見送る名殘、又立戻るを蘭丸が、中を隔つる鯨波、早亂れ入る諸軍勢切立なき立女武者、其名も、高くかな書の、筆にとゞめて末の世の美談と、こそは「成にける、寺中は合戰眞最中、力丸坊丸一同に一進一退離散して、或は討れ或は討ち、つゞくわらても有らはこそ堅甲利兵の大軍を防ぎ戰ひ流るゝ汗と湧出る血汐、から紅ゐに水くゞる瀧田の川に楓葉の落て流るゝ如くなり寄せ手の從將安田作兵衛、春長を討取らんと、塀際にさし寄れど、味方の勢に隔られたやすく内へ寄付かれず得たりと鎗を、力杖ゐいと、一はね高塀に、飛上りたる早業さそく目ざましかりける「次第なり、さしも名高き靈場も修羅の巷と鳴る鐘の、天地にひゞく陣太鼓亂調に打立〳〵、先にすゝみし田島の頭手勢引具し一同におめき叫んで攻かくれば、春長公一越調、詞「返逆光秀はいづくに居る主に背

く天罰思ひしらせてくれんずと、弓杖ついて罵る大音、さしも勇有武智勢恐れて思はず進かねたぢろく隙にさし詰引詰、射給ふ矢先に先手の軍兵、はた〳〵と射たをされ、あだ矢はさらになかりける、此虚に乘て坊丸力丸、鎗をひねつて八方へ突立なぎ立阿修羅の如く廣庭さして「追て行、客殿には春長主從、膝をならべてどつかと座し、力丸無念の齒がみをなし詞「ヱ、口惜や往昔天文年中より、今天正十年迄、四海の内に横行して、武威を以て天下の兵亂を切しづめ、民を塗炭の中にすくひ、四方の敵國君の英名を、鬼神の如く恐れふるひ、正二位右大臣に昇進し、大業既に成就せしに逆臣惟任が爲に空しくならせ給ふとは、天魔の所爲か口惜やと、血汐にそゝぐ、血の涙とゝめかねたる計也、春長一言の詞もなく、御はかせを脇腹へ、がばと突立引廻す、俱に冥途の御供と力丸坊丸殉死の切腹むざんといふも餘り有御身の果ぞ「あはれなり

○六月三日の段

董卓は漢室を燒拾伯知は水を以て趙をひたす、例を爰に眞柴が軍師名に高松の城廓も水死の合戰强勇も手に汗、握る計也、武家の家でも姦さ婢共は寄こゞり、詞「何とあげは、毎日〳〵ふる雨で水の增るが癪の種、是と云も尾田勢の皆仕業、中でも憎いは眞柴とやら松葉とやら、突さがしてやりたいわいのふ、サ、コレ〳〵其突次手においたはしいは、妹御の玉露樣、浦邊山三郎樣にきつい惚樣、大方埒の明く時分に成て、山三郎樣の爺御李之進樣、ア、林丈左衛門めにお討れをされた故、此程わふらく〳〵と戀病ひ、チ、さうかいのふ、こちらも覺の有る事、どふぞ首尾して上ましたいと、道やさしき女の情、打連一間へ入にける、思ひ内に有れば、其色眼中にすゝむとかや父の最期に亂れ髮、無念の仇を角額、浦邊山三郎利氏は、主の、留主を窺ふて林を一太刀恨んと、屋敷へ入込生死の境、斯と白齒の、玉露が、出合頭に見合す顔、はつと驚き引返す、袖にすがりコレ待てたべ浦邊樣、詞「お前は深いお望が、有つてのお越と、見たれ違はぬ形かたち、其お姿に戀てが

れ、送くる千束の返事さへ、あいはつれないお心ぞ、せめて一夜の添臥を赦してたべと取付いて、じつと、しめたる手の内に、心餘りて見へにけるコレ〳〵詞「聲が高い、推量の上は包むに及ばず、かくまい置かるゝ敵丈左衛門何卒今日中に手引して、勝負をとげさせ下さらば、こなたの心もむりくにせト、サ、何と、せいたる面色、玉露も胸をすへ、詞「成程〳〵私しが爲には舅御の敵打を見合せ、アノ垣越に御案内申ましよ、ホ、其詞に違ひなくば、まだ云聞す子細も有、こなたの部屋へ、そんならかうと手を取て、顔は上氣に散花の、玉露姫は晴の霧、濡にかしこへ入にける、折もこそあれ立歸る館の主清水長左衛門宗治智勇を兼し其骨柄、跡に從ふ、女房はまだ、十九二十二つ三つ、雪の白粉やり梅が紅花色そふ、綠子をいだきいたはり立歸る、宗治は眉をしはめ、ヤイやり梅晩春の末より三家へ人質、悖諧共遣はせし所、いまだ合戰の勝利も決せず、敵にかこまれたる此城中に歸されしは子細が有ふ、何と〳〵アヽ、尤のお尋、此度三家御加勢に向ひ給ふといへ共、手を空しくして日を送り、水の手一つ切事叶はず無念さは夫迚も同じ事もし討死致されては大事と成、手立を以て一時の合戰は遠からト、それ迄は英氣を養ひ、置るゝ樣、うさを晴すはコレ此若、隨分〳〵やり梅も、心を付よとはげしき御諚、此子の顔も見せたさ、見たさとゑくぼに愛持つやり梅が色ぞ籠て見へにける、義にはり詰し宗治は、指折て日をかぞへけふは早六月三日皐月の末より敵方に大變有凶星を見極め置つるに、土手を突上優長なる仕かた、間者を以て敵方の樣子、聞出さんと愚へ共、是ぞといふ謀なく、空しく入水する時は後々諸人の物笑ひ降參するは家名の耻辱是迄度々の合戰に不覺を取ぬ宗治が、猿寇者如きの計略、斯口惜き籠城も天より我を責給ふか、何とせんかとせんと名に秀たる武士も、傾く運と突息も天を睨んで、ゐたりける、あはたゞしく庭先へ士卒一人かけ來り、詞「何か談する筋有と郡家よりの使として、安德寺和尚只今本陣へ參着せり、殿にも早く御越と云捨家來は引かへす、詞「ム、汝が歸城の上安德寺の使の樣子聞捨

かたし、是より諸士に對面致し、事の子細を申聞ん、其方は郡より預り有丈左衛門囚人同前なれば萬事心を付よ、ヤ行け〳〵心得ましたと立上り奥と表へ引別れ二の丸さして出て行、雨吹拂ふ松風の、夏山とめし、虫の音をしるべに、漂ふうらづたひ振も、小づまもかい〳〵しく、夫を道びく健氣の玉露、花も木草も落花狼藉、互に切合ふ穂先とはさき汗にひたする計也いらつて切り込太刀先を、しつかと請留丈左衛門、詞「ヤ小賢しい浦邊山三儕が親の奎之進、評議の席にて某に惡口吐し入耳虫、討て捨たを恨に思ひ刃向ひ立は及ばぬ事、ヤヱぬかしたり丈左衛門、左いふ儕は、冠山の落城をよそに見て、當城に逃込し人畜生、父の怨旁の恨、思ひしれよと刎かへす刃尖く双方が請つ流しつ烈しき爭ひ、見る玉露は心も空山三が念力通じけん林は刀打落され、逃んとするを切ふせ〳〵、父の敵覺へよと、のつかゝつてとゞめの刀、首引切つて大地に打付、詞「ハヽア嬉しや〳〵」コレ玉露殿禮は未來でおさらばと、腹かき切らんとする所、戻りかゝりし長左衛門、やり梅諸共走り出、詞「ヤレ死るとはうろたへ者赦しもなき敵を討し言譯の切腹ならば、某が計らひを用ひ、まさかの時の討死こそ武士の道城外の水をくゝり、久吉の陣所へ馳込、僞りならざる次第を賴み、かくまひもらふが術の第一、敵の空虛變の次第、相圖を以て知されよ、折も有ば眞柴を討取、名を萬代に殘されよ、ヤヽ一時も早く〳〵とせき立清水、ハヽア有がたし、武士の數にも入べき大功、命を的に仕負せて立歸らんと驅出す、ヤレ山三樣御待なされ玉露殿とのわりなき中最前ちらりと、ヤイヤ申宗治樣、御妹樣と浦邊樣との二世の御緣、ホヽすき合た二人が中、門出を祝する、扇も時の島臺土器、松は元來常盤木の、繪にはあらざる松竹梅、末廣びろと、夫婦のかためゝ、詞「ハヽア重々の御惠、玉露殿も隨分無事で、御前も御怪我のない樣にと、立派にいへどもなま中に、馴れし枕のもつれ髮、はなれがたなき兩人をわざとせいする宗治夫婦、扇屏風やあふぎの別れ、心定めて城外へ飛が如くにかけり行、甕沙背水の謀を廻らし、見ぬ唐土の元帥も舌を卷べき、奇代の

軍術、水かさ増る大河の流せきといめたる土俵岩石大木運ぶ地車の、水やり音頭もちんば馬、揃はぬ肩も降參の、すき腹武士としられける加藤は土手の高みに上り、詞「ヤナ者共汝等はことゞく降參の者共成に此度の勤功、大將始某迄滿足せり、此合戰終りなば、急度御扶持有べきぞよ、ソレ兵粮を遣ひ終らば、當時は休足致すべしと、下知を傳ふる其内に向ふに何か騷ぎし人聲、正清きつと打詠め、詞「ハテ合點の行ぬ、高松の城外にあやしき取合何にもせよ心得ずと聲もせず見渡す向ふに、我組留んと數多の軍兵、小舟に打乘、右往左往に追廻せば、山三郎は水中をくゞりつ、拔つ働けば、鵜よりも早き水練水魚、そこよ爰よと組子共、うろ付中に、舳先を持、ゑいやうんと打返せば舟はまん〳〵小舟の組子浪のもくずと成りにける、此有樣に殘りの兵船、進みかねてぞ見へにけりこなたの岸には正清が、何者成ぞ心得ずと、手ぐすね引て待所へ、血氣の浦邊は拔手を切、忠孝二つを顏に當て、飛鳥の如く遙の堤一聲諸共飛上れば、何者成るぞと取衆雜兵目もかけず、加藤が前に両手を突、詞「某は郡家の家臣浦邊山三郎利氏と申者、高松の城内において、親の敵を討取、立退んとせし所、城中より討手かゝり手詰の難義何とぞ武士のれ情に、御かくまい下さらば生々世々の御厚恩と、敬ひ入てぞ願ひける、加藤正清聲をあらゝげヤア紛らは敵願ひの筋誠親の敵を討は武門の譽と、郡家より恩賞も有べき筈返つて搦捕んとする高松勢、紛らは敵御邊の僞り、眞直に申されよと、疑ふ詞に、詞「ハヽア御尤成御仰、某が討取し親の敵と申は、冠の城を拔出し、林丈左衞門と申者、我父歪之進と聊の論により、父を欺し討に討たる奴其無念止事を得ず何とぞ怨を報せんと主人へ敵討を願へ共、軍中とて取あへなく、剩へ敵丈左衞門は清水宗治殿に預けと成ば心に任せず空しく月日を送る内、此度の合戰に付久吉公の計略にて、一城諸とも兎の如く、水底のもくずとならんは必定、然ば父の鬱憤を散せん時節なしと、透を窺ひ本望は達したれとも、御赦しなき敵討、いか成咎有んも知ず惜むべき命にはあらねとも、亡両親の跡をもいと

なみ、其上にて切腹致す我存念暫しが程の御恵、御聞届下さらば、忘れ置じと手を摺て、頼めば正清につこと笑ひ、詞「ホ、事明白成る汝が願ひ、尤其理なきにはあらね共、敵々たる此時節諸卒の疑念もらかゝなり萬事は主人の賢慮に有ん、日も早西に傾けば、イザ同道と、正清が深き心の計らひや、士卒來れと夕ばへの、下知の詞に、はつと、立上れとも内心は、久吉詞ん血氣の若者毒蛇の口の、水筋を伴ひてこそ行過る、向ふ遙に漕渡る主は誰とも白浪を、振と衣の戀無常、急ぐ船路や行空も浮世、なりける「次第也

○六月四日の段

東魚來つて四海を呑む、西鳥來つて東魚をくらひ、四海既に穩ならざる戰場の地の理を窺ふ山づたひ、近習召連隆景は、しづ〳〵谷間に立休らひ、詞「サア〳〵旁此度の合戰誠に武門のはれ軍、郡の枝城尾田が爲に悉く落城に及びし上、軍慮に賢き清水が城廓、久吉が謀に乘せられ、入水と成たる高松の味方を助ん其勢なく、はるゝ〳〵此上て援兵成れ共、敵の要害嶮〳〵たるに、三澤久代が非道の企隆景が方を救ん術なく、三家の心もまち〳〵たるに、三澤久代が非道の企隆景が見察違はず白狀の上に本へぼつ返し禁籠申付し上は、敵方へ裏切なさん妨なければ、先此山の頂に柵を結敵陣を見つもり、明日中には攻かゝり、敵の勇氣を試んいサア〳〵いかに〳〵、ゝゝ、仰迄も候はず、我々ともは先手を乞請雌雄の合戰、一命は風前の塵、義は金鉄、千變萬化とかけ破り、さしも名を得し久吉が頭を取んな瞬く内、御心安く思し召と實いさましく見へにける、遙向ふに人音は何者成かと見やる内、現世未來を一寺に納め、大地の僧都安德寺、清水が妹玉露姫、伴ひ歩む一木の影、それと見る、より手をつかへ、詞「ハア隆景公には御堅勝のてい恐悦至極、拙僧今日清水長左衛門樣へ御見舞に參りし所、妹御玉露樣を以て何か密談の御使、味方の諸士にも心置く籠城、幸ある安德寺誘ひくれよとの御頼、委しき子細は存ぜねとも、是迄同道仕ると申上れば玉露も面はゆげなる顔を上、詞「女のあられぬ事ながら、敵の陣所へ使の役、隆景樣の御賢慮を、伺ひました其上と、兄上の

差圖故、安德寺へ諸ともに御見舞旁々參りしと、差出す文箱小梅川、手に取り上て讀下し、詞「ム、一旦和議を相調ひ、事を計らん計略有れど、先達て申遣はせし所、此使に惠瓊老、清水の妹玉露を差越んとは面白し、去ながら大地の住職、敵陣への使者とは憚り有と、他聞を恐れる密事の大役、足下ならでは叶ひがたし、先々陣屋へ入せられ、暫時の休足あるべしと、詞の折もてなた成る、茂の枝に飛違ふ數多の鳩が、あらそう餌ばみ「隆景屹度打詠め、詞「ハテあれ見よ、只今鳥類の餌ばみの爭ひ、思ひ合すは昨夜の夢、我陣中へ飛くる村鳥、色めきたる草葉をくはへ、塵塚山をなしたると見へて夢散せしに、目前人を恐れず餌による鳩の嘴先にて、責つゝきたる「レあの蔓物、瓜は春長の紋所、三つ五つは五躰を表し、其身を包む衣服こそ敵の城廓、鳩は源家の臣烏、我は清和の末孫たり、此蔓物の瓜によりし、尾田春長を一戰に討取べき神の告か、但しは既に變有告か、ハテあやしやと明慮の大將、尾田を討たる光秀が、京都の大變神鳩のふしぎは後にぞしられたり、安德寺すゝみ出、詞「ハテ智人の仰至極せり、唐土周の世に當つて、赤色の烏武王の陣に泊る、人々怪しみ迷ふといへども大公望是を吉なりと、悅す、果して其詞に違わず、周武の正に天下と成、君にも眞其如く今陣前に鳩の集りきたるといふは當家の吉瑞、愚僧もそぐはぬ戰場の、役目もやはり此姿、赤色ならざる此衣の頭ごかしに取入て、强氣の尾田方取ひしぐも、國家の御爲天下の爲玉露樣にも御油斷有な、ゝ、御念に及ばぬお僧樣わたしも名にあふ清水が妹、見馴聞なれ軍學軍術、夫に迫り力を合せ、味方の怒り、兄樣の無念をはらすい敵の大將久吉が、首討取て立歸らん、やはか仕損じ申べきと、詞涼しき玉露がおめる色なき武家育、さもいさましく見へにける、かゝる所へ味方の郎等片山藤太、水にひたせる惣身の、汗諸共に押拭ひ、詞「仰の如く水中をくゞつて敵の陣所に近付事の樣子を窺ふ所、猶も流るゝ水筋を、せき切る手當の石橋、詞「或は土俵蛇籠の用意、是をさゝゆる清水が郎等、忍び入て水筋を、切んとあせれど敵陣の備へは名

にあふ加藤正清近寄る軍兵事共せず、右と左になぎ立て追立切伏られ水の哀れと流行清水が勢の敗軍は、目も當てられぬむざんの有様、かくて空しく時日を送らば底のみくづと成行城兵、御賢慮有て然るべしと、息繼ぎあへず訴ふれば、隆景は打點頭、詞「かく迄敵に取切れ、ぬけがけして高名せんとは、自殺を招く清水が城兵只此上は惠瓊老、宗治と申談せし如く、玉露諸共久吉が陣所へ立越、兩家和睦の計略こそ肝要ならんと隆景が、詞にはつと頭を下、詞「修羅の巷へ出家の身の、入べき筈なけれとも危急を救ふも敎の道、玉露樣には御用意有といさみ進めば神妙〳〵、詞「両將へも此趣具に某言上せん、イザ両人も本陣へ同道申さん來られよと物に馴れたる小梅川、其名かんばし武士の、刀切れ尖き直燒及、きたひにきたふ隆景がはまれは世々に顯はせり

○六月五日の段

閑鱗山揮一同して風雨烈しき中國の、物騒がしき蛙が鼻、久吉公の陣舘亂杭高垣幕ひ廻し、兵具ひつしとおちべしは、事厳重に見へにける、太郎兵衛治郎兵と呼集め、落葉枯枝をかき寄せて、瀑氣を拂ふ雜兵とも、一つ所に寄集り、詞「何と斯した所は、かんしやうもうの煙りと出かけた、チイ今にも合戰といふたら戰場の切合、集錢出しの呑くらひ、軍場の小商人の手目上させてやらふ物何をいふても長の籠城、我身で我身の儘ならぬと、重き口から、からゞめき、ちんふん勘六智惠有顔、〳〵、尤おりいさまし〳〵、某逆も戰場に出立なば、彼唐土のあぼす東六が奇計を以て、鎗先尖き餅田樂串ざし乍ら摑喰、鬼殺しと見るならば、あたり次第に呑ほして代物といふ大敵には、喰逃、呑逃早いが勝と惣々が、咄しの耳を突拔鐘、詞「スリヤこそ軍が始まると、達者な物は口斗、足もしどろに立て行、スハ事こそと加藤正清、一間を出る庭先へ雜兵一人かけ來り、詞「只今遠見いたせし所、あやしの両人陣中さして參るよし、引とらへて詮議に及び候所、郡高松両城より使者として女一人、僧一人、通しませうやと窺へば、ホ、使者と有れば捨も

置れず案内致せと追つ立やり、待間程なく取次に、從ひ來る葉月の、使者は二人の品形振の袂に名香の、高き寺僧諸共に使者の座にこそ、着きにける、正清威儀を繕ひて、詞「是れは〳〵郡高松両城よりの使と有て珍事の御両人、御使者の趣承はり、加藤取次仕らん、樣子いかゞと正清が、尋ねに愛持玉露が、詞「ハヽ、正清樣とやら御取次の段御苦勞に存じます、自らは高松の城將清水宗治が使玉露と申者「清水申越るゝ趣は此方の家中浦邊山三郎と申れ若衆樣サア其山三郎不慮に城内を拔出たる不忠者、御かくまいの由承はり、早々使者を以て所望に及ぶと雖とも、御歸し下されざる段我々とも不審はれず、もしや使の不念不肖なる事ばし有て武士の意地を立ぬき御歸し下されんも計りがたし、此度は汝參つて御機嫌の窺ひ、同道して立歸れと有使の口上、御前宜しく御披露と詞のあやも玉露が、詳に相述る安德寺詞を正し、詞「玉露の申さるゝ通り、浦邊山三郎は郡の家人同前故、此方よりも使を立ると雖とも御承引なさによつてあたま役に愚僧が使、とにもかくにも貴所の御執成偏に賴存ると、頭法下れば加藤正清一何事かと有せしに、浦邊に付て何日といひけふといひ、何か事も有さうなる三家の胸中軍はわきへ取置て、福原梶田の勇將等馬を出さるゝは此虎之助一切合點參らね共、女義の使出家たる御方を、追返すもおとなげなし、取次は致し申さんが暫時隙入事も有ん、あれなる一間に相待れよ、然らば後刻と式禮目禮、玉露引連れ安德寺左右へ「こそは別れ行、朱明の空も一面の、雲かけ隔つ浮草の、浪に漂ふ山三郎、又降雨に足音の紛れ出るもしめ〳〵と、いとゞうさをや重ぬらん、後のこなたに玉露が、物音窺ひ立出る襖もそつと八目の關、盡ぬゑにしの顔と顔、なふなつかしの山三樣御身にお怪我いなかりしかと、縋り付いたる振袖のならぶ翼や連理の緣、妹背わりなく見へにける、詞「是は思ひがけもなき玉露殿、何故爰へは來られしな、サイナ此城中へ入込しも兄樣の深き御思案、お前に逢て力を合せ、眞柴を討てとくれゞれの仰、首尾能く仕負せ立歸らば、誰憚らぬ夫婦中、手柄を見せて下さん

せと、夫顔の女氣い、胸にやるせぞなかりける、詞「我もやたけとはやれ共一かたならぬ名大將、猿冠者の猿智恵と聞しに違ふ眞柴久吉、此軍配に我々式が及ばんや、所詮すぐ〳〵高松へは歸られず、清水殿への申譯、只今腹切相果る、其方は立歸り此通り傳へてたべ、さらばと斗柄に手を、かくる夫に縋り付、詞「ヤア待て下さんせ、姫ぜの身で敵城へ、れ使者に來るも何故ぞ、れ前に逢いたさ顔見たさ、死ば一所とかたらひしわたしをふり捨死ふとは、聞へぬわいな胴欲な、わたしを先へ手にかけて殺してやいの我夫と、命惜まぬ武家育、涙色めく婉孌の、袂は戀の淵ならん、涙隠して山三郎、詞「ヤアいらざるくり言嗜まれよ、敵へもれては互の耻辱、そこ放されよと突き退る、イヤ〳〵わたしも俱にとわらそふ後、ヤレ早まるなと聲をかけ、立出る眞柴筑前守久吉、詞「高松より使者に來りし玉露へ、山三郎を返しあたふる、又浦邊へは此書面、久吉が心を込めし清水殿への送り物、此

いたいさ足早にこそかけ出れば、夫の跡に引そうて命の親の久吉樣と、悅び足も地に付かず、飛が如くに立歸る又も聞ゆる陣鐘につれてかけくる女武者、金石ならねど湯王際萬槃を亂し都より、夜を日に繼だる阿野の局、詞「久吉公に御見參とさゝへる組子事共せず、廣庭づたひ、歩みくる、ヤア者共某に逢んと有女武者、曲者なり共何程の事や有ん、對面して取せんず、者共引けと御下知の聲聞取て阿野局ヤア久吉殿かといふを押へてあたりを見廻し、詞「音高し〳〵、御自分の形相一と方ならず、一大事の注進ならば、敵へもれては味方の非運、心を付て物語られよ、腹帶しつかと、即座の氣付、サヽヽ樣子はいかゞ、何と〳〵、ハテ、されば候春長公には安土を立出ましく〳〵て都本能寺に入らせ給ひ、中國加勢の御手配諸軍を催す時こそ有れ逆臣武智が夜討の企、詞「フウ何光秀が謀叛とや、シテ〳〵勝利はいかに〳〵、ハテ、明れ二日子の下刻水さへ音なき眞の闇、早洛陽に亂れ入り夢驚かす俄の戰場、

詞「太刀よ具足もとぼしき寺内、數万の敵は甲冑に身を固めたる小手脚當味方は薄衣綾錦濃紅いの玉襷、詞「自始闘丸兄弟、死地に入たる働に庫裏方丈も忽に、血汐くま取修羅道の巷に迷ふ築山かげ、射つ射られつ切つきられつ劔の山、八寒地獄となる鐘は五臓を射抜君の弓勢、先手の軍兵一筋の鎗につらなる三人五人恐れをなして引退く、詞「シテ君には御安体にてましますか、心元なし

いかに〳〵、ハツア申も便なき事ながら、運の盡きとて闘丸殿、田島が手鎗に無念の最期、勝に乗たる光秀方、味方は殘らず打死し春長公にも御腹召れ、シテ三法師君は、若君樣は、細川殿へ落しまいらせ二條の御所も一時に亡び、火中の煙と夫給ふ是ゞ筐のお家の御旗此上は久吉殿の智略にて、武智を討取亡我君の尊靈に、手向てたべや眞柴殿と死る今端の際迄も、君を大事とはり詰し心の花もがつくりと折てちり行貞心貞死、義女の鑑を殘しける、

諸軍の心迷はさぬ道智入の名大將、先立主君亡人の生死は同じ梓弓吊ひにこそ入にける、無常に傾く、夕陽は、坊主あたまものびゝ欠び、時刻移ると安德寺、エヘン惠瓊は咳拂ひしづ〳〵歩み獨言、詞「ヤレヤレ此永の日中待せて置、返答もせぬ上に鷹爪はまだな事、皷屑一ぶく志さへ大將、主腹斗肥すと見ゆる、餘りな釣付け樣佛の顔も三家の使、歸つて此由申上んと行んとす、詞ヤア〳〵「安德寺惠瓊和尚いづれへぞ久吉對面仕らんと聲かけられ、ハヽヽいや早愚僧の生れ付いたる近飢、餘りの隙入に甚腹中難困にせまり、一つ鉢の御芳志に預り度勝手へ參るといふを打消し、ハテ扨久吉が志の供養有事を、眼前見捨て歸られるお僧の心底いぶかし、そこ動くなと眞柴久吉、障子をさつと押開き、上段に飾置いたる金鴨の煙も薫ずる、手向草、心惜しと尻目にかけ、詞「ヤア大將の詞とも覺へず、出家たる我をいぶかり動くなとは、物を知らざる今の一言、ヤアいふ惠瓊、都の大變立聞して、郡へ注進

せんず心底隠しても隠されまじ、軍勢を引入れ、修羅を導く惡僧、寺領が望か知行が望か、返答聞かんと未前の眞柴、屈せぬ惠瓊、大口明いて高笑ひ、詞「ハヽヽ、サテぬかしたり猿冠者、愚僧をとらへ惡僧とは何のたは言、僻が主たる春長は、伊吹山の鬼の再來、諸寺諸山迄責苦しめ、佛敵遁がれず本能寺の庭にれいてのたれ死したる尾田の幕下、主に劣らぬあばれ者、五畿七道でくらひたらず、此中國まで攻下り民家を苦しめ、人種を絶さんと、はつしとする魔王の根元、亡し絶すが佛の役、奇代の名劔受取れと、はつしと打ばしつかと留、詞「ハヽヽ、出家に似合ぬよき嗜、童れとりの坊主が惡口、久吉が耳には入らぬ、誠相手に成りたくは、天地の道理成佛の明らかなる事を悟りし上、相手に成りて取らせんと、飽迄きびしき咄弄に、奥歯碎くる無念、眼中つか〳〵と立寄り、眼尻逆立息をつぎ、詞「ナヲ威勢につのり人もなげ成今の惡言、當時安穏寺の六寺を踏へる此惠瓊、童劣りとは何をいふや久吉、ホヽたとへ大寺の名僧たり共、心中六道の迷ひ有ては、成佛の道思ひもよらず、汝が目より魔王と見抜し某が、天地の道理をしらせんと惠瓊を目がけ打かけ給ふ以前の蓮花衣、是はいかにとためつがめつ見て恟り、覺の袈裟は矢剣の橋にて、天下を得ると見付置いたる奴殿かと呆れ果だる斗也久吉につこと笑はせ給ひ、詞「いかに惠瓊老、其時はだいなしの一文奴、算木書物も當てにはならぬと貴僧の詞、後の證と其時に申請たるッレ其袈裟、矢剣の橋にて我面相見付し貴僧の天眼通、此久吉が望む出世にあらぬ共、天より生ずる惠なればあしくな思ひそ惠瓊殿、詞「此上は尾田と郡の和を結ばるゝが出家の役、よもや違變は有るまじと、名智の詞に安德寺頭を摺付〳〵て、詞「ハヽ理非明白たる御仰、訓狐といへる物は夜は微塵の虫をも見れ共、晝は大山さへ見る事あたはず、此坊主も眞其でとく、御身黑ぐんたる日かげの其時はよく奇相を見分たれど今天下に名を得、武威白晝にかゞやく時は相見あたはず見損せし訓狐に等しき此坊主に和談の御諚は冥加至極仰に從ひ和談とゝのへ奉らん、早速の會得は道の名僧、一刻も早く急がれ

よと、仁者の詞にゝ、はつと、天より照す久吉の威勢に恐れ引かへす、道は道なり明らかゐ、心てらして立歸る、跡見送つて久吉公、心をこらす軍慮の庭先、見越の松が枝はつしと射たる、矢文はいかにと立寄てかなぐりひらけば返書の實名、清水が自筆一紙の血判つら〳〵と讀終つて表に向ひ、高松の城主清水氏、眞柴久吉が一書の胸中射抜しは適々、此上は三流を切落し諸人を助けあたふべし、いざ〳〵、是へと清水長左衛門宗治、兼て期したる討死の、弓矢打捨庭上にどつかと座し、詞「さ、天運強き久吉殿、只今射込みし矢文の返書、彌〻御承知下さる上は、味方の助命頼み入ると、鎧脱き捨腹一文字に引切苦痛、夫の跡をしたひくる、妻は手負と見るよりも、のふいたはしや悲しやな、斯した御最後させまい爲郡一家の人々より、わたしと以ての御教訓無になすのみかいたいけな、此子は可愛ふないかいと夫に縋り伏轉び前後もわかず泣居たる宗治苦しき目を見ひらき、詞「ヤア愚や女房何くり言、郡三家の人々は某か胸中をよく御存知そち達親子に今生の、暇乞させんず爲の御情ハテ冥加なや、有がたや、一才の時よりもくらひ込んだる大祿の、恩義はいつか謝すべきぞ、詞「夫に引かへ小知の銘々主恩に命を捨る、數萬人の最期ばを助けん爲の此切腹、玉露山三が密書の傳、心を込め一久吉の書中、味方に取ては盲龜の浮木悦べ女房何はへる、氣を張詰めて悴をばよき武士に仕立上、主君に忠義を怠るなと高松の良將も、子故にくらむ深手の苦痛、見るに付ても彌増る夫の最期稚子の行末、思ひやり梅は女の淺い心から、太守の仰誠ぞと斯した別れを知らずしてお跡をしたひきた物を暇乞さへろく〳〵に云たい事の數〳〵を、いつの世いつの添ぶしに語らふ物ぞ情なやこれ〳〵何にもしらぬ稚子さへ虫が教へる寢覺の愛、てうち〳〵は父上の、今端を拜む合掌ぞやといだきしめ〳〵伏轉びたる女氣を不便と察する久吉公こたへてもる宗治が恩愛一度にたもちかね清水涌くるはら〳〵涙血水川邊に浪越て土砂吹飛す如く也哀を見捨て眞柴久吉かしこを屹度打見やり、詞「これ〳〵見られよ両人相圖を以て川筋の土俵岩石嫌ひ

おく、切て落せばあり〳〵と平地どおさまり城外へ、遁れ出たる若君の悦びの鯨波聲、コレ見物あれと大將の敎には、つと心付　詞「ヤ、幸ひ成かな是に見物と、よろぼひ〳〵腹帶しつかと白布の高見を傳ひよぢ登り、見ひらくまぶたに高笑ひ、ヤ〻女房悅べ死後の思ひ出此上あし、浮世の夢もけふ限り昨日の敵いむれゐる白鷗、鯨波と覺へしは、浦風とこそ、聞へけり、我はあしたの露ときへ清水流るゝ柳かげしばしが程の世の中に心のこさぬれさらばと、白布とかんとする所へ、詞「ヤア〳〵宗治しばし〳〵、小梅川隆景安德寺が理解によつて尾田家一体水魚の因、見届けて成佛有れと、聲諸共に大將隆景衣服改めしづ〳〵と入來る跡に安德寺、手に捧げたる白壹は神文とこそ見へにけり、互に和議を取納め、惠瓊は神文押いたゞき、詞「ハヤ、目出たく和談とゝなふ上は拙僧はお先へ歸り久吉公の御神文両家へさし上奉らんと、禮義も足もいさみ立、衣しばつて歸らるゝ、久吉は詞をあらため、詞「両家和順におよぶ上は何をかつゝまん、主君尾田殿都本能寺において、武智が爲に御落命と、聲かきくもる一と雫萬里にみちて、袖しぼる、驚く人々制する眞柴、たるみを見せドとつゝ立上り、詞「主人の敵武智光秀、都に登り吊ひ軍三家の助力あるやいかにと、聞より隆景につこと笑ひ、詞「ヤ、軍のそなへ有りながら手をむなしくせし味方の若者、ときたて置たる弓矢の手前、ねがふてもおき後詰の加勢、詞「隆景采をなし申さん、ヤ〻、頼もし〳〵、早上京の用意をなさん、者ども早くと御下知に、加藤正清始とし人馬せばしと居ならんだり、うれひにしづむやり梅をいさめなだめて隆景公、詞「父に劣らぬものゝふと小梅川が成人させん、心殘さず旅立と、こも る情にいつこと笑ふがいとまごひ、此世の念も宗治が忠義の家名稚子をもうりそだつる仁者の道、雪きれ空も青〳〵と、天王山の晴いくさ、名をとる射とる弓矢とる、天下を鳥の聲につれ、いざや武智を討んずと勇む正清

両將も、都をさして出て「行く

○六月六日の段

扨も逆賊武智光秀、多年の恨一戦に春長父子を討奉り、妙心寺に砦を搆へ勝ほこつたる諸軍の勢ひ、倶に威風を顯して備へ嚴しく守りゐる、中央には光秀の母さつき、褥の上に座をしめて、イヤ四王天、詞「何事も見ざる聞かざる云はざるに、咄しが有らば嫁女庚申待、緩りと聞かふドリヤ奥へいて夢でも見ましよと、立を引き留田島頭、後室様の御立腹、其理なきには有ぬ其夫れは一途の思し召、幕下と成つて春長へ、身を寄せたまひし御大將時を得て其機に臨れ、天の時を知といふ、何卒御機嫌直されて光秀公に御對顔、偏に願ふると願へば倶に嫁操只幾重にもと手を突て、願ふ心の夫思ひ、道理にも又殊勝なり、さつきは少し面を和らげ、詞「夫程に迄皆の衆が、頼みを聞ぬも年寄のかた意路、そんなら息子殿の歸り次第奥へしらしや、コリヤ女共は來て腰を打、ヤアイと老の立居もおも〳〵と、嫁が介抱四王天、引添てそ入りにける、斯かる世にも花開く、色香もしるき初菊が、奥の透間を立出て、詞「ほんにヤア此重次郎様は、しんきなお方ではあるはいなァこちの思ふ様にもない、間がな透がな軍學とやら色の道には疎いので、一倍心をいためると、女心の物思ひ後に立聞く重次郎初菊殿是にかと、いふ聲聞いて、重次郎様か、ヤ、聞へぬわいなと計りにて跡は得言ぬ、おぼこさは、赤らむ顔に顯はせり、詞「是は又嗜みやいのふ、又しても〳〵、顔さへ見れば恨のたらく、親々の赦しを受け、コレ未來永々かわらぬ女夫、少しも隔はないわいの、イヤ〳〵つんともふァしんきな永々とやら未來とやら、其先の世は、しらね共、縁を、結ぶの神様が、御苦勞なされうない子の、ふり分け髪の其中から、あれと是との結び合、親の赦しも有る物を、ついに一度の逢瀬さへないは、餘り胴欲な、お情ないと娘氣の、胸の有りたけかきくどき恨かこつぞ道理なり、思ひは同じ重次郎、詞「ハテもふ今迄は不調法、以後は急度嗜む程に、コレ赦してたもく、そんなら願ひを、ハテ誰憚からぬ云號、世間廣ふ遠慮はいらぬ、ヤ、忝や嬉しやと、ひつたり抱付く妹と背に、わりなく見へしゐにし也、折から聽く聲の音、光秀公のお歸りとしらせに、恟り

飛退く二人、所体繕ふこなたより、妻の操も出向ひ、待間程なく立帰る武智十兵衛光秀、武威轟かす強將の常にかはりし屈詫顔、席を改め詞を正し、

詞「ホヽ三人とも出向ひ太儀、シテ母人には御嫌機よくお渡りなさるか、サアイナア先程も田島頭と自がわつゝくどいつ、どふやら斯うやらお口が和らぎ、母公様とも睦ドう、ふゝ、夫れは重畳出かいたく、左有らば直様御對面、イヤ夫れには及ばぬ、母が直々參らんと聲うちかけを引かへて、木綿布子に風呂敷包をせなにちよつこり賤の女の姿、見るより驚く人々、操は傍に摺寄つて、

詞「系圖正しき武智の御家、殊更四海の武將とも仰がれ給ふ夫光秀、天下の御母公様共云はるゝ御身が浅ましきお姿は若やお心違ひしかと、尋ねにつこと打笑ひ、詞「ホヽ忝くも清和源氏の嫡流たる武智の系圖、元より武勇の家柄なれば、誰に恥べき謂なし、年は寄れ共心は鉄石、渇しても盗泉の水を呑ずとは、お身達もよふ知てゐやる筈、心穢れた我子の傍片時も座を同じうせんは我日本の神明へ、恐れ有り〳〵、伯夷叔齊をならい只雲水に

從ふて出行母、是が此世の別れぞと、義強き母も恩愛の、涙をぎらす有様はいとゞ、哀ぞ増りける、光秀は默然とさし伏ひていたりしが操の方は涙ながら、詞「申コレ我夫、母様の只お一人、いづくを當と長の旅、なぜお留めされませぬぞ、ムヽ不忠不孝との御さげすみ、今更申す詫もなく、せめては母のお心にさからはぬが寸志の孝、四海の内は此光秀が掌に有る、おとめ申な其儘〳〵、道は惡人程有て根強い魂、ナニ、云ん方なき人外めとにらむ目元にはら〳〵と涙かくして立出る、心のはり弓強弓の引ぞ、煩ふ嫁孫の中に悲しき初菊が、是のふ申祖母様と扣へる手先ふり拂ひ、見返りもせず出て行、はつと泣き出す人々を、制しとゞめて、詞「サア〳〵者共、母人の御行衛いづく迄も見届けよ、御手道具の用意〳〵と光秀が鶴の一聲あまたの軍卒、簞笥長持挾箱、其外雑具鉄乘物、御母公様のお姿を、見失ふなと足早に跡をしたふて急ぎ行、影見送りて光秀は、何か心に打うなづき、奥操悴重次郎、嫁初菊諸共次へ立ちやれ、用事あらば手を鳴すと、心有げな詞の

はし、ヘイとはいへど立兼る、ヤアヽず〳〵と何を猶豫早く立よときめ付けられ、心は跡に殘れ共親子三人打連て、是非なく、次へ入相の、鐘が無常を、告渡る、實物凄き庭の面、忍び出たる四王天、主君の樣子いかゞぞと、身を潜めて、窺ひゐる、夫とはしらぬ光秀が、有合硯引寄て、筆くいしめし唐紙の、表に何やらさら〳〵〳〵かくと、見るより重次郎躍もせず陰物に、守りゐる共、白書院、只一心に書認め、筆投捨てむんづと座〳〵諸肌寛げ指添を、扱や玉ちる氷の刃やヽ打詠め両眼に、はら〳〵涙くいしばり、既に斯よと見へければ、主從小影を走り出、ヤレ早まり給ふな父上と、取付く重次郎四王天鏡の如き両眼をくわつと見開き聲震ひし、詞「コレ我君、コヽヤこなた狂氣召れたの、今朝より始終の樣子、心得がたく思ふ故、萬事心を付る某、物陰より窺へば、出し顔に辭世の一句、順逆二門なし、大道心源に徹す五十五年の夢、覺來て一元に歸す、とは何のたは言、君臣を見る事塵芥の如失し萬民を苦しむる暴惡　神明是を誅するは光秀の技手なり、父の詞に紛天の與ふるを取らざれば災ひ其身に歸す、左程のことを申さず共、よく御合點のこなた樣、切腹とは馬鹿〳〵しい、人はしらず此四天王田島頭殺す事能ならぬと居丈高、詞「ヤ、そふじや〳〵父の命は我々始萬卒に至る迄、御一身に及ぶ御命、臣義を守る共、君是を補助せざれば大將とは申されず、只生害はといまり給ひ、下萬民の苦しみを救ひ給へと右左り、涙と俱に諫めの詞、光秀はは、たと横手を打ヽ、誤つたり〳〵、詞「一天の君の御爲には、惜からざりし此命、暫しはながらへ事を計らん、先は綸旨を乞受て、猶も背かん者共を悉く誅戮せん、詞「急ぎ是より我は參内、汝ら二人ハ久吉が、都へ登るを半途に待受、一戰にぱつ返せよ、イデ裝束をと立上がれば、近習小性が心得て運ぶ、大紋立ゑぱし、立派に着なす、骨柄は邊り輝く其粧ひ早引出す栗毛の駒、光秀ひらりと打乘てヤア〳〵重次郎、田島頭諸共に西國へ馳向ひ、必共に、油斷なく軍功を顯はせよと詞にはつと四天王ハヽ、君、御

出陣に及ばず共、詞「某彼地に向ひなば、猿冠者めが素頭を討取るは手裏に有、アイヤ〳〵彼も知れ物、定て遠き計略有らん、コヽ親人の詞共覺へず、父にかはつて某が、軍配取て一戰に敵の首を實檢に備へん、コレ氣づかひ有なと勇みす〳〵みし我子の骨柄、ホヽ天晴〳〵潔よし、我も跡より出陣と、手綱かいくりしと〳〵、乘出す駿足馬上の達者、轡の音は秋の野の虫には有でりん〳〵〳〵綸旨をやかて頭に戴き及向ふやつ原打立て、追立切ちらし追付け四海に葉を伸ん、いそふれやつといつさんに大内山へと「急ぎ行

○六月七日の段

接化隨緣眞實に無量の惠み洩ざれ共佛敵猛威の春長に世を狹められ鮒重成無念ながらも杉の森砦をかまへ〻しくも、寄手を防ぐ唯一心矢叫びの音閧の聲天地に、潮ゝ動搖せり、かゝるけはしき其中に、媚きつたふ婢共、軍に馴て氣は張弓禪鉢卷腰刀、追ゆゝしき身の備へ、中に小笹が才發顏詞「イヤのふ浪江、何とマア騷がしい世界ではないかいの、切た〳〵と切つはつを世渡りに、ま出仕たらいで春長殿、慶覺樣を相人に取り憎てらしい軍事、サイノウ追付　如來樣の罰が當り、首がころりと飛であろといへば兵卒口口に、詞「ヲヽサ飛とも〳〵一向一心にかたまつたる我々、殊更主人喜多の頭樣の軍配、石山においても度々の勝軍、負る事はけんにもない事、殘り多いは王樣の御挨拶、あたまの役でおとなしく丸ふ納めて慶覺樣が、石山の砦を引拂ひ此杉の森へ御陣がへ、しやうこりもなく又寄せかけた尾田の大軍、とつと奇ても不可思議光如來のれ力にや叶ひませぬじやないかいなア、あいな、ナツ〳〵待つたり、叶はぬ次手においといしは若旦那孫市樣、尾田と和睦が破れた計に御使の越度じやア爺、御樣の御勘當、何と可内、御詫の願ひを一統に、して見る心はないかいやいと、おる〳〵涙惚々が、すゝり上たる水涕も、忠義のはしと殊勝也、斯ともれ聞く一間より孫市が妻の雪の谷、我子の手を引きしとやかは出る姿もおのづから、思ひ有る身の打しはれぼんに主あり家來なりと、思ふて優しいそち遣か志し、聞く嬉しさにい

と丶猶、悲しき夫のお身の末、どふなる事と自が、心の内を推量してたもやいのふと有りければ、婢始士卒共、顔見合せて詞なし、娘松代は母の顔打詠め〳〵、詞「コレ申母様おまへは何をむつかるゞ、同じ様に皆迄も何を泣きやる、早ふと丶様や弟の重若を呼まして來てくれやい、此間の満害をお目にかけて、譽てもらいたいあいのふ、譽てもらひたからふ、そなたより此母が逢たさは山々、暫しが間も母の傍、得放れぬあの重若、定めて泣てばかりゐるで有ろ、かわいの者やとくいしばり、泣音を包む雪の谷が心の中ゞ、せつなけれ、襖のあなたに重成が高らかに咳拂ひ、扨は舅君のお出あるぞと、いふに心得婢が席を下れば雑兵共地に鼻付けてかつ跪ひ待間程なく悠然と、立出る鱸喜多ノ頭、不興氣にあたりを見廻し、詞「サア女原、此所に用事はない次へ立ち、軍卒共も何をうりかり、要害を頼みに搦手の守り怠るは一大事、早くまはつて心を付けよ、サ、行け〳〵とおつ立やり、詞「イヤ嫁女、そなたにも云聞かし、悦ばす事が有ゞや、ア、私に悦ばす事が有ゞ御意遊ばすは、ム、夫孫市殿の、ハテ扨、又しても不吉者の悴が事、左様な事でおりない、當月二日の曉に天文の考みし所、東に當つて白氣自然と立登る、是則敵の大將、春長が腹身と頼む勇者の内に變心の者有て、事をやぶるの前表、今日迄口外せざれ共數日の籠城お身も定て心勞と思ふから、安堵させん爲申聞す、見よ〳〵追付世を廣ふ、足利の正統たる慶覺君の御代となさん、何と此上もなき悦びではおりないかと、未前を察す明智の眼力こなたは一途に夫思ひよき折からとすり寄て、詞「イヤもふお嬉しい段ぢやございませぬ、がどふぞ成ふ事なら、其白氣とやらが立ちましたが、孫市殿の御勘當がもりますといふしらせなら、ほんにどの様に嬉しう存じませうぞ、憚りながら慶覺様と御一所に、どうぞ世に出られます様に、親御のおじひお情けでと、いふを打けしゃレまだしつこい、詞「かゝるめで度折からによしなきたは言聞さたくない、お身も孫を連て部屋へ行きやれ、エ、何をぐず〳〵、早く立ちやれとかみ付られ、何とせん方投首し娘松代を伴ひて、

しほ〳〵立て入にける、蹤に重成只一人立上つて、通路の鈴引ならせば一
聞の御簾、さつと小性がかゝぐれば念珠他事なき慶覺君、重成が音づれ何
事か有やらんと、仰にはつと頭を上、詞「今朝より御機嫌を窺ひ奉らんと存
ずれ共、敵の朝がけ短兵急に寄たれば軍配に暇なく、一泡吹せ味方の勝利
攻口を退き候へば、一息の間と漸〳〵只今御前へ伺公、不禮の段は御高免と敬
ひ、深く逃ければ誠忠俊乂の一人時に合ねば、此程よりの心勞、推察せり
詞「兄義輝君は三好松永が爲に亡び給ひ、今又我は春長が爲に斯の如し、よ
しなき命ながらへて萬民土炭の苦しみと云ひ、諸卒の命を失はんより、早
く我一命を斷、萬死を救ひ得させよと、御目を閉て稱名を、唱へ給へば重
成も君の惠の有がた涙、胸におさへて氣色をかへ、詞「ヤエ、云がひなき御仰
夫れ軍は和に有て衆にあらず、馬洗廐養に、等しき尾田の寡兵、何程の事
や有ん凱歌を上るは瞬く内、君にもしろし召如く、國大なりといへ共戰ひ
を好めば必ず亡ぶと、詞「近くは武田勝頼、父信玄迄其威隣國にならぶ者な

く猛虎の如く、諸侯も恐れ候へ共勇にはこり、武に慢じたる太郎勝頼、詞「
累代の武名も一時に朽ぬ、春長迚も先其如く、御心弱くて叶はじといさめ
申せば慶覺法師、打うなづかせ給ひつゝ、重成來れと御座をば立せ給へる
其所へ、大息ついて驚森八郎、御注進と手を突ば、人々いかにと仰の下、
されは候軍は味方の勝利なれ共、力責には叶はじと、數千の車に燒草を積
乘て櫓〳〵の其下へ、山の如くに積重ね、たゝ燒打にと云せも立ず、喜多
頭はつたとねめ付け、詞「ヤア馬鹿〳〵しい何のたは言、其苅柴こそ身が申付
けたる一つの計策、御大將の御前あるぞ麁忽の注進、早く立てとわざと怒
りの一言もしらで驚森八郎は、拍子ぬけ〳〵引かへせば、いざ御入と八方
に、心を配る重成が底意をくみて慶覺君奥殿さして入給ふ、夏の日の、長
きも我を、恨むなる物思へとや夕暮の、空を、待けり孫市が肩にしつかり
鎧櫃、八目を忍ぶ陣笠の、歩にやつしたる傾は、昔にかはる勘當の、身は
猶更に心の隔、何とせんかた切戸口、佇む、こなたの茂みより忍び出たる

大の男あたりうそ〳〵窺ひ足、奥を目がけて忍び行、後の方より、孫市が曲者やらぬと膝をむんづと組で引戻す、詞「シヤちよこ才すなと振はぢき、直に抜討ち及の光り、かいくゝつて抜合ns手練の切先はつし〳〵、打合及音何事と、手燭片手に立出る雪の谷火影を覆ひ物陰に息を詰てぞ守り居る庭には二人が上段、下段、飛鳥の働き孫市が難なく曲者切倒し、のつかゝつて、とゝめの刀、血押拭ひ刀を鞘、納る丈夫死骸の懐中、探る手先に取出す一書、扨はと月にすかし見て、詞「ムヌリヤ當月三日に春長父子、光秀が爲めに亡びしとな、ヱ、心地よや嬉しやと悦び勇む後にば、紛ふ方なき夫の聲飛立計走り寄、逢たかつたと縋り付嬉し涙ぞ先立てり、夫も道夫婦の愛情やゝ打うるむ目をしばたゝき、詞「誠や飽ぬ夫婦が鄭々に、悴を連て思はぬ離別、父の勘氣を蒙りしも暴悪非道の尾田春長、約を變せし故なれば、何卒きやつが首討取り親人の實撿に備へなば、勘當詫の網にもと、心はやたけにはやれ共、悴重若召連ては、足手纏ひと未練にも子に引されて送る月日、鉄砲疵にて脚さへも思ふに任せぬ崎人者、詞「武道は盡し我身の一生は、て御主君親人のお役に立て死ん物と、覺悟極る今日只今死後に頼むは二人の子供、心得たるかと夫の詞、聞く女房が泣出す、其口押へて、詞「コリヤ親人のお耳に入らば返つて妨げ、イデ悴を手渡しと、かたへに直せし鎧櫃、蓋取退れば重若が、かゝ樣のふと走り出縋り歎けば母親も、胸に涙の滿汐の引くや血脉と奥よりも姉の松代が聲聞付け、詞「おとゝ樣のお歸りか、重若も戻つてか嬉しい〳〵、早ふ遊ばと手をたゝき悦ぶ姉弟雪の谷が、膝に引寄、聲曇らせ、詞「ヤ、嬉しかろ〳〵、何ぼふ其樣に悦びやつてもの、久しぶりにかゝつたと樣は、腹を切らねばならぬといのふ、コレ孫市殿、いのふ、何にもしらぬ二人の子供、れ前は可愛ふござんせぬか問けて、死る覺悟を極たとは、餘り氣強い胴欲な武士が立て死さぬ〳〵死さぬと、かきくどくのも忍び音に、奥へ憚る聲に角立、詞「ヤア未練至極の共はへ頬弓矢取身の切腹

ほ此身の本懐今計らずも寄手の大將、是角六郎を討て捨、懐中の一書を見れば、都本能寺において春長父子、光秀が爲に討死と、春孝よりのしらせの密書、此騒動に寄手の奴原、一旦圍みは開く共「再び寄せんは必定たり危急を救ふは此孫市、君と父との命にかはり、首を則ち久吉が陣所に送り和を乞ば、元より寛仁大度の真柴、よもや違背は致すまじ、詞「使は忰重若丸、兼て認め置たる一書、斯迄思ひ込だる某、妨げなす不所存者コリャ〳〵二人の子供爰へこよ、兄弟ともにとゝが子か母が子か、云て聞かさば賢ひ者と撫つさすりつ尋るも、胸に無量の思ひ有、心にしらで弟の重若コレとゝ様わしはお前の子でござるはいの、何じやとゝが子じや、ヲヽよく云た出かしたなあ、サア姉の松代はどふじや〳〵と、問ど年だけうぢ〳〵と母に氣兼の言、兼れば、詞「ム、返事のないは嬶が子か、我子でなくば出てうせうと、呵り付けられ泣々も、詞「何のかゝ様の子じやでござりませぬとゝ様の子でござりまする事背きはせまい、アノ親の云ふ事聞ぬ者は不孝者じやとかゝ様が常々からのお叱り、どんな事でも聞きまするのふ、重若かなたも云ふ事聞きやるかや、ァィよう云ふ事を聞くはいのふ、ヲヽ扨々ういやつ、然らば申付る役目が有、此とゝが此短刀を腹へ突立たらばな、コヽ此刀と脇差にて身が首を引切此一書を添て久吉殿へ持參せば此上もなき孝行者、合點がいたかと細やかに、云教ゆれば驚く母にらみ付られくいしばる親の心はしらぬ子の譯も七つ子重若丸、詞「そんならとゝ様の首を此脇差で切と、孝行になりますかやヲヽなる共〳〵日本一の大孝心コレ姉様も合點かや、サア早ふ腹切て下されと、いふにたまらず母親が我子を引退、詞「ァヽ忌はしい子供では有はいのふ、コレ孫市殿、いかに望が立たい迚何辨へない此子供に、親を殺せと教る人が又と世界に有ふかいのふ、夫や我子を安穩に置たい斗にとやかくと、心を盡す女房を思はぬ仕方情ない、親の別れも身の科も辨へしらぬ佛様、鬼せにうとは胴欲あせめて此子が生先を見屆る迄生て居て下さりますが親の悲嘆

頼むはいのと計にて譯も、詞も涙川膝に漲る風情なり、詞「サテ益なき淳聞たくない、三千世界に子を思はぬ、親が有ふからうつけ者」左程悴に此首を討たしがたく思ひなば、子供にかはつて介錯せよ、サテ夫は、得心なくば繼切ふか、じやといふて是がサテ未練至極の其はへ頬、所詮介錯思ひも寄らず見さげ果たる女めと、取て引寄せ、提緒の早縄、庭木の杉にしつかりと結ぶ妹脊の亂れ口、こがるゝ其身は梢の猿、腸を斷うき思ひ母の有様見るよりも二人の子供はおろ〳〵顔、コレ〳〵松代、重若もとゝ様の両の手に取り付て居やゝ、必ず放してたもるなと、あせれど夢か現なた、夫は今を最期ぞと、諸肌脱は弟の重若、詞「とゝ様もふかや、サテ今が親への孝行時と、言つゝ短刀我腹へぐつと立ればはつと散るから紅ひに目もくらみ心も消る雪の谷が、闇路をたどる思ひにて正躰もなく伏沈む、歎きの折も一間より、詞「コレ悴其刀引廻すな、云ふ事有りと父重成、しづ〳〵と立出、詞「ホヽ適忠期をとげよ、とは云ながら二人の孫、親の死別も夢現、聟成人の其後は歎くで有ふ悔みおらふと思へば不便弥増て、我は老木の末近く、便とするは母の親、むごい祖父じやとコリヤ　恨でばしくれるなよ、詞「我迚も骨肉の悴を見殺す胸の内どの様に有ふと思ふぞいやいヤ、是非もなき次第やと、胸に湯玉の湧返る、親の思ひの有難涙見上、見れろす一世の別れ、手負は涙おしとゞめ、詞「ハッ有難さ父の恵忠孝全く望は足ぬサテ重若松代、最前とゝが申付たる役目は只今サテ早く、〳〵、コレ〳〵必ず切まい、切たらば母があつゝをすゆるぞやとれどせば道子心に、ひかゆる手先、詞「ヤサ詞背くと子でないぞさとゝ様の御用を聞とかゝ様が呵らしやる其嬶様はあの様に縛ちれて居やつしやる、コレ重若、かゝ様のアノ縄をといて上げてたもいのふ、サテ夫れでもあの様に白眼しやるもの、サテ何はど呵らしやつても大事ない、此縄といてたもいのふ、コレ申舅御様、同ド様に脇見せゝとなせとめて下さりませぬぞ現在孫を親殺しにするが情かじいかひのふ此縄といて下されと、頼む嫁より頼まるゝ、舅が胸の苦しさを、あたゆるつちさ鉄面は、涙に増る思ひ也

斯ては果じと孫市は、我子の腕先持添て、しつかと當ればぐわんせなく、ともに力身て、詞「と、様斯かや、ナ、そうじや出かす、〳〵も一世の別れ、二世の名殘と雪の谷が消る間を待つ夫の命、神も佛もない事かと、亂る〻心亂れ髪血汐手ふ血の涙、上には父が稱名の聲、諸共に、りんの音慶覺君は他念なく南無あみだ佛、〳〵、なむあみだ佛の回向の恩德廣大、不思議にて往相回向の利益にて還相回向の回入せり、聲は如來の迎ひぞと、ゑい〳〵と孫市が首は前にぞ落にけり、あつと、恐れて、飛退子供母は其儘打倒れ前後不覺に、泣き叫ぶ、始終見屆け重成が目に持つ涙押拭ひ、詞「〻生者必滅の理り今目の前に見るも夢、せめて夫の切首に、暇乞をと立ち上り、繩ときはどけば雪の谷は、其儘首にしがみ付き、詞「覺悟故とは云ひながら、いとし可愛い姉弟に、嫌や心が殘るであろ魂魄去らずば今一度、物云てたべ孫市殿、我夫のふと押し動かし、盡ぬ名殘の百千行、聲を限りに泣き叫べば、詞「ナ、其歎きは理りながら、主君へ忠死の悴が功し、出かしさを、思ひやつたる雪の谷が、正体涙の聲を上げ、詞「家を忘れ身を忘れ討死するは武士の習ひと覺悟しながらも、得諦ぬは女だけお救しなされて下さりませ、長い別れとしらぬ子の常の遊びか何ぞの樣に、親の首をばむごらしい、詞「切が手拵に成るといふ敎は外に情ない、いかなる宿世の報ひぞとくどき立てたる恩愛の、心はひとつ重成も瞬き繁くばら〳〵、涙は雨か夕雨か車軸を、飛す如く也、折しも吹來る風に連れ響く貝鐘聲數、又も敵や寄くるかと、驚く雪の谷騒がぬ老人、思ひがけなくかしこより、詞「足利の正統たる慶覺君を御迎ひの爲、中川清秀參上せりと呼はり〳〵、入來る清秀喜多頭はくはつとせき立ち、詞「ナテ和議を破りし無道の春長、其祿を喰中川瀬平、納過ぎたる上下衣服、御迎ひとの何のたは言、ナ、一旦の憤りは尤至極此度の合戰は御舍弟春孝殿、事を計りし禮を亂す、去によつて眞柴久吉、内意をもつて立越しは密に都へ供奉せん爲、早御用意と云せも

立ず、詞「逆賊光秀が爲に自滅せし春長父子、知るまいと思ふかや、石山方に、名を得たる鱸喜多頭重成眼は日月、及ばぬ事をときめ付くれば清秀猶も詞をつくし、詞「成程推量の如く當月二日、都本能寺にいて主君の横死愁ひに沈む我々、僞りの有るべきや、取分け子息孫市殿、死を以て久吉殿へ願ひの一條、今より一子重若丸父の忠義を頭に戴き、二代の鈴木孫市と名も改むる両家の和睦、詞「慶覺君の御本願照すも法の道廣く、やがて目出たき榮へをと情の詞に疑念も散じ、こゝ誤つたり〳〵、詞「斯程厚志の眞柴中川、伴が願ひ我君の、法の門出一時に開け此上もなき我悦ひ、コレ〳〵嫁女、孫が手柄は二代の忠臣歎きの中の悦びと、舅の詞聞に付け、いとゞ涙に雪の谷がいらへも更に泣斗、早御立の刻限と追々、警固の諸軍勢、見るより重成手を打て、詞「萬事に馴し清秀殿、ハテ我君へ此様子申上んと立上がればイヤサ聞迄もあし、とくより慶覺是に有ると、しづ〳〵と立出給へば、はつと

忠死により萬死を出しも佛の惠み、久吉が情の計ひ、又清秀とやらんが士し過分至極とのたまへば、清秀なほも敬ひ深く、詞「コヽ有がたき君の御諚、此上の御心置きなく早鶏鳴に程近し、いざ御發駕とすゝめに君は、おり立給へば、詞「さン暫く、御門出を壽きの孫、めが一さし、御上覽に入れ奉らん嫁女、常々教へし扇の一手早く、〳〵と舅の詞、涙ながらに、取上ぐる、皷のしらべ、重若が、詞「祖父様、謠をうたふてやと、扇をしやんと、身の備へ、あら目出たや末廣の、君の榮へは萬々歳と祝しけり、拍子につれて稚子のかなで、祝する末廣の、其一曲は末の世に、名をとゞめたる鈴木のおどり、因縁斯としられたり、いざ御立ちと清秀が、詞にくり出す、行列の、おさへは二代の鈴木孫市、武士の鎧となる鐘の音もろともにあけて行、夜もしら〳〵と白鷺の森をはなれて、飛びこふも、君のさかへを白鳥の、神の應護と勇み立ち都の空へと「供奉しけり

○六月八日の段

あはれむべし、英雄の武將及の露と消て行く、内大臣春長公けふ一七日の大法事と老若男女わかちなく、參詣群集を當にして見せ物、輕業力持戰國の世も下々の、身過にかはりなかりける、所の百姓引連てのさ〳〵來る陣張甚助、茶やが床凡に腰打かけ、詞「ヤレ庄や太郎作とやら、此度尾田春長の法事は、主人武智左馬ノ介様の御差圖、情を以て萬事御宥免有れば、付上がりのした百姓共、誰が赦して、輕業じやの、曲持のと仰々しいふるまひ、外は格別、當村は此陣張甚助が支配、立ふとふせふと身共次第、小家がけ茶やに至る迄、今日中に取拂へと、主の威光に肩ひぢはり、さも大へいに罵れば、庄や太郎作あたまかき、詞「其お腹立は御尤でござりますれど、又しても〳〵、イヤくわあで村々は亂が騒、此頃武智光秀様、將軍とやらにお成りあされ、少しこゝら近邊は穩、其悦びの參詣群集、せめて四五日御用捨をと、言つゝ腰の早道より、取出す小錢茶碗にうつし、ヤアお一つと差出せば、手に取り上て惚りし、にらんだ眼はどこへやら、くわらりとかわるからくり的言「ハヽヽヽヤ何庄や、何かいやい主人光秀公が天下をしろし召、其御悦びとあれば苦しふない〳〵、輕業成りと唐の芝居なりと勝手次第、拙者元來茶が好だが、大服にしてかへてもくれる氣はないかと、肩からはへた、爪長代官、百姓共は口揃へ、詞「何が扨〳〵、あんばいなりと遠慮なしに、おかへなされて下さりませ、然らばどうぞ今一ばい所望々々と差出され、めい〳〵紙入巾着を、さらへて漸八分目、些少ながらと差出せば、詞「是は〳〵重々の御馳走、いやもふ此お茶さへ下さらば、少々は拙者の天窓で、土佐踊なされても苦しからず、用事あらば承らん、必心置れなと欲に目のないにて〳〵笑顔、サアしてやつたと百姓共、庄やを先に立上り又もや御意のかはらぬ内、代官様へ差上る、出端の錢をもふけふと挨拶そこ〳〵、立歸る、跡に甚助只一人くやらす、煙草のけむりより、胸に思ひのたへ間なき、おこぶは後にもぢ〳〵うぢ〳〵、ドリヤまからうと立上り歩みかゝればこらへ兼、申〳〵と呼かくれば、甚助あたりを見廻して、詞「ハテ心

得ぬ、柳の小陰より申〳〵と呼かけるは、夜たかさんかいな、ナイナあいなと走り出、はづかしそうに縋り付、いゝんとすれど赤らむ顔、甚助はためつすがめつ、れこぶが姿を眺め入り、見れば本肉の仕事盛り、身共に取付きこだわるは、子細ぞあらん物語れ、ついにまみへぬげんさい殿と、いはれて漸顔を上、詞「ヱ、ついに、見ぬ〻は聞へませぬ、去年のさつきの夕まぐれ道頓堀のなら茶やで、思ひ初たが縁のはし、丸寐の、ぼんやは丸清の二かい、千年も寓年も、かはらぬ契り龜竹のふし〳〵迄がなへる程、心よかつた床の海、音はぎし〳〵、岸本や人の噂に鳴戸やを、ほんに嬉しの森新でわしや悦んでゐる物を、夫にれまへはあげ物やの荷箱か大正の鰻の様に、ぬらくらとしたぬめた様、忘れゐるとは、餘りな、聞へぬわいなと取り付て恨の尺をくどき立て、すゝり上げたる有様は、達磨の高傳にのら猫のそばへかゝりし如く也、甚助道理と脅撫さすり、詞「一々心に覺の合紋、顔見忘れたは惡るかつた、幸ひれも徒然の砌、ア水茶やへサアおじやといはれておこぶもろつく〳〵、渡りに船と帆柱を、かゝへて戀の港入、打つれ立て歩み行、流るゝ音の水さへも、物騒がしき戰國に、行儀亂さぬ、生立ちは、武智が一子重次郎人目を忍ぶ深編笠松原傳ひに歩み來て、有合床凡に腰打かけ、詞「ハテ思ひ廻せば恐ろしき世の亂、きのふの君臣はけふの怨敵、親は子を討ち子は親に、刃を合す修羅の巷せひもなき世の有様と暫し思に惱けり、漸く心取直し、父光秀が刃にかゝり空しくならせ給ふたる、春長公の靈前へ、御許容なく共後世の爲、イザ拜せんとさしかゝる、道をさへぎる陣張甚助、家來引具し大音上、詞「ヤア主殺しの武智が倅そこ動くな、うぬが家來と偽し某こそ眞柴方、久吉方への奉公始腕を廻せとひしめけば、〻〻へ、久吉方へうら切りの二た股武士の甚助め、腕立して怪我まくるなと、股立取て身構へたり、詞「ヤアちよこざいな小わつぱめ物ないはせず討取と、いふより早く一同に切てかゝりし刃の稻ま、暫し時をぞ移しける、いらつて切り込甚助が刃物からりと打落し、付入るさそく重次郎、切伏々々とゞめ

の刀、相人なければ是迄と衣紋、つくろい刀を鞘、納る不敵の重次郎、是より直にば丶樣の、御隱居所へ發足し、此身の出陣お願ひ申、敵のやつ原かけ立、おぎ立て寄手を惱まし、骸は修羅の巷にさらし、武士の本意を達せんと勇立たる若木の花、あたら盛りの春も見ず憂を都の假住居跡に、見なして

○六月九日の段

德は咎徹に勝ち仁は凶邪を除くとかや、されば眞柴久吉中國の大敵を攻討んと水をもつて手をぬらさず忽ち和睦相調ひ、大物の浦に着陣あり武名の程ぶり類ひなき、加藤正清進み出、詞「信長と云ふ鬼の再來と、おぢ恐れし春長公を討取つたる逆賊の武智光秀、一時も早く都に責入り、ひねり殺すが君へ追善、早御用意とせり立れば、久吉莞爾と打笑ひ、詞「今に始ぬ正清が勇言ヲ、心地よし〳〵、去りながら此久吉中國に發向せば、都に足を入れぬ內伏勢を以て討取らんと、武智が結構顯然たり、うかつに上京なすときは過うて死地に入らん、必油斷致すなと、軍慮にさときを久吉が詞にあつと諸軍勢、英智を感ずる斗也、折ふしひよか〳〵濱傳ひ、蕨ふご片手に百姓長兵衛、旅僧一人引連れて咄し交くり行過る、軍兵共は聲をかけ、詞「ヤア〳〵土民蛸坊主、眞柴筑前守久吉樣の御前とも憚らずのさばりあるく橫道者扣へおらふと咎められ、〻そんなら久吉樣はそこにござるか、お坊爰じやとやい、ヤレ〳〵嬉しや〳〵、ヤア一ぷくしませうと蕨ふごをつさり高あぐら、詞「ヤアヤアまだぞんざいあうじ虫めら、〻コレ〳〵其樣にけん〳〵云んすな、久吉樣のお目にかゝつたら、さつぱり譯が分る物じや、イヤお坊、成程左樣、大阪今里村の長兵衛、江州の觀音寺の僧献穴が參りました、とおつしやつて下さりませ、ヤア長兵衛でもけれん穴でも對面なさる用事はない、きり〳〵立てと爭ふ軍卒、眞柴久吉御聲かけ、詞「某に對面せんとは仔細ぞ有ん、是へ通せと御仰、ハッと恐れて兩人を君の御前にいざなへば、久吉二人を見下し給ひ、詞「終に見馴ぬ其方達、仔細いかにと有りければ、ハヽ扨も物覺のわ

るいお人、わたしを見違へてござるかいの、ッレ、いつやらの事で有た、今川とやら庭訓とやらいふ大將に負さつしやつて春長樣、と二人連でこちの内へ逃げ込しやつたを、お世話申た今里の長兵衛でござりますはいの、ハイ愚僧は前方江州の山寺觀音寺の住職致しおりました時、岸田村の百姓の息子岸田太吉といふ者を私が小性にして置きました時にあなたがお立寄り遊ばしまし、其小性に御茶を汲したらお目にとまり、奇麗な小性じやこちへれこせとおつしやる故、二言となしに若衆を献じた献穴と申者、樣子有て只今は今里村に佗住居、餘りおなつかしいやら又はお願ひの筋も有り、わざ〳〵是なる長兵衛殿と同道で參りしと、高座馴たるしら聲はり上げ、汗押拭ひ語りける、久吉は打うなづき、詞「成程聞ば一々覺の有る事、両人とも無事で重畳、シテ我達が願ひの筋は、ハヤ外でもござりませぬ、知ての通り本能寺で春長樣をころりと云した武智光秀、きのふからおらが在所へ陣[illegible]染のお前樣、武智に討すは殘念なと此お坊との咄し合、そこでおらが一生にない智惠を震ひ出し、お前樣をそつとおらが在所へ連て逝で、思ひがけなふ光秀めをころりと云してこまそふと、わざ〳〵迎ひに來ましてごんすサア〳〵一時も早ふ用意して武智を討取る魂膽さしやませ、ほんにまだ忘た事が有るはい久しぶりでお目にかゝつた土産は是と藥ふごよりこて〳〵取出す爪二つ、詞「コレ是はおらがあけ地に出來た眞瓜うり、切てあがつて下さりませと、自慢らしげにさし出せば、詞「サヽ明地に出來しを切て喰とは幸先よし滿足々々、殊更汝が光秀を手引して討せんとは天晴忠臣出かした〳〵恩賞褒美は両人共、望に任せ得さすべしと仰せに悦ぶ両人がり、勝色見する味方のどよみ、皆勢ひを添にける、かゝる折りもかたへにならぶいな村より、國を作つて武智の軍卒、久吉やらぬと切てかゝれば、加藤正清、詞「シャちゃこ才なあぶ蠅共、目に物見せんと大太刀拔て切りかくるを受つ流して亂軍の、互に鎬を削り合、濱手の方へ戰ひ行、両人は立つ居つ、こりや

あらい大騒動怪我のない内久吉様、サア〳〵ござれと先に立、歩む両人明智の久吉出行僧を引戻し、ぐつと一しめかたへに投退け、詞「百姓長兵衛とい偽り、誠は武智光秀の舊臣四王天田島ノ頭とゞまれやつと聲かけられ頭巾かなぐりぐつと詰かけ、詞「道の久吉よく察した、うぬを偽りおびき寄せ討取らんと計りしに見顯はされて殘念至極といふより早く藁づとに、隱せし業物拔放し、久吉目がけ切付くれば、ソリャ遁すあと軍兵共、群り寄て突かゝる、鎗の穗先はしの薄、なぎ立て〳〵切結ぶ勇猛不敵の四王天、乾達婆王の荒れたる如く突伏せ切伏せかけ上れば、あしらい兼たる眞柴方途を失ふて見へにける、久吉も心を配り味方の勝利覺束なしと、有合ふ僧の袈裟衣手早に取て我身に着し、馬にひらりと飛乘て、濱手の方へ只一人騎駈出す向ふへ四天王、夫と見るよりくり出す穗先、得たりとかはし一さんに駒を早めてかけり行、ヤアきたなし返せ猿冠者めと跡を、したふて、「追て行、田畑あぜ道嫌ひなく追かけ追詰四王天額に無念の息煙立て勢ひ込でかけ廻る、宿に夫と加藤正清踊上つて田島ノ頭、觀念せよと切込太刀、心得たりと渡り合双方劣ぬ雄猛力火花を散して戰、ひしが、いらつて打込正清が凡人ならぬ奇代の切先、あしらひ兼て四王天漂ふ所を切り伏せ〳〵、主人の安否氣遣ひと跡に、見なして走り行、さしも勇氣の田島ノ頭、數ヶ所の深手によろぼひ〳〵、詞「ナヨ、殘念や、斯迄手に入る眞柴久吉討もらし夫のみならずむざ〳〵と、名有る勇者の首をも取らず討死するが口惜やな、思ひ廻せば廻す程、運の強き猿冠者め、此土をはづれいつか又きやつを討取期や有ん、無念無念と云死に、爰に名のみ殘したる田島ノ頭が身の果ぞ哀なりける

○六月十日の段

詞「なむ妙法蓮華經〳〵〳〵、御法の聲も媚さし尼が畸の片邊り、誰住む家といふ顏も、おのが儘なる軒のつま、あたり近所の百姓共、茶碗片手に、高咄し、詞「なふ婆様、こな様も、見た所が、上方で歷々の御衆そうなが、何の爲に面白ふもない此在所へはござつたぞいの、ナヽコレ〳〵甚作そりやい

やんな、京の町は武智といふ悪人が、春長様を殺しで大騒動、大かた又下へ下つてゐやしやる久吉殿が戻つて來て、武智と是非に一合戦なけりや濟ぬはいのふ、そんなら年寄はうか〳〵京の町には居られぬとかくあぶなげのないやうにこんな在所へ來てゐるが大でき〳〵、時に近付がてら妙見講を勤るといよい手廻し、大きな馳走に逢ました、是から隨分お互に御心安ふいたしませう、サア〳〵逝ふと口々に、云たい事をたくしかけしやべり廻つて歸りける、老母はつと〳〵門送り庭の千草に打水もたもつ葉毎に、風薫る朝を目當てに、くる人は武智が閨に咲花の操の前は家來を遠ざけ、嫁の初菊伴ふて窺ふ切戸の庭前に花に心を、養ふ老女、夫れと見より手をつかへ、詞「後室様の見舞として、只今參上いたせしと慇懃に相述る、詞に老女は打笑みて、詞「ヤ、珍らしい嫁女孫嫁、はる〳〵の道よふこそ〳〵、去ながら伴光秀、當月二日本能寺にて主君を害せし無法者、同じ舘に膝ならぶるも、先祖の耻辱身の汚れと、舘を捨て此在所へ身退きし此婆を、詞「見婦と

はれてがましい、善にもせよ悪にもせよ、夫に付が女の道、操の前は武智十兵衛光秀が妻、そなたは又孫の重次郎光慶が嫁でないか、生死分らぬ戦場へ、赴く夫を打捨て浮世を捨た姑に、孝行盡すゝ道が違ふ、詞「妻城に留つて留主を守るが肝要ぢや、モヤやもめ暮しの樂みには、夕顔棚の下涼、捨べき物ゝ弓矢ぞや、言放したる老女の一徹、跡は詞もなかりけり、常の氣質とさからはず、詞「いか様後室様のおつしやる通り、此様に只お一人ムつたら、何もかも氣散じで、マア第一ゝお身の養生今から私も初菊も後室様のお傍に居て、飯も焚たり茶も涌し、お宮仕をせうぞいの、と有合前垂襠の上に引しめ茶釜の傍、端香の籠る姑の、しぶ〳〵機嫌を取兼る娘心に初菊も、どふ濟事か濁り井の、深き寄縁の釣瓶縄、水くみ上んと立寄れば、

⊕「コレ〳〵嫁達、シテ〳〵孫重次郎は、城に殘つて居召さるかさればでござりまする重次郎が願ひには、どふぞけふの軍に高名手柄が顯はしたいと、父上迄は願ひしかど、婆様のお赦しなきに出陣するも本意でおし、母に取次してく

れとくれ〳〵の願ひ故、餘り健氣さ祖母様に御機嫌の程いかゞぞと窺ひに參りましたと語る内、老母は涙をはら〳〵と流し、詞「ナ、うるさの嫁が物語り主を討たる逆賊の邪非道の軍の評定、聞がいやさの此住居ガ又孫を嚮るではおけれ共、非道お伜光秀が子に、重次郎といふ武士が、生れてくるとは是も因縁悔んで返らず、戰場の事聞きたふない、いや〳〵、情あの浮世やと、無量の思ひ百八の、珠數つまぐつて居たりける折ふし表へ草鞋がけ、風呂敷脊にいつさせき蛙飛込道野邊の清水、結ばん夏の旅、西行もどきの僧一人門口に立休らひ、詞「諸國執行の一人旅、近頃申兼たれど御宿の報謝に預りたし、押付けながらと云入れる、聲を老母が聞取て、詞「見苦しうございますれど、お心置なふ御一宿、夫は千萬忝い、左樣ならば御遠慮なしに御免〳〵と上り口腰打かくれば二人の女、草鞋の紐を解かくれば、詞「ア、勿體ない〳〵搆ふて下さりますな、旅仕付けた坊主の氣散じ、木納屋の隅でもつひころり、蚊屋も蒲團も入ませぬ、お心遣ひ御無用と、同伴入來口、人目を忍び只一騎、窺ひ立聞武智光秀、心得がたき旅僧と、生垣押分けさし覗き、思はず見合す母の顔、老母は何か心に點き、詞「ナ、わしとした事が心の付かぬ、コレ御出家樣、此板圍ひが則ち風呂場、水は幸汲で有、つひばや〳〵ともやして、暑い時分じや行水して休んで下さりませ、婆も跡で相伴しませう、ア、イヤ夫には及びませねど、相伴と有は涌しませう、そんなら御免なされませと、包引さげ氣散じに湯殿をさして入にける、味方の軍卒両手をつき、詞「御子息重次郎、光慶後室様に御願ひの筋ありと、只今是へ御越と、いふ間程なくしづ〳〵と、家來に持せし櫃鎧かき入させて打通り、詞「コリヤ〳〵者共そち達は用事はない陣所へ早くとおつ立やり、威儀を正して両手をつき、詞「母樣を以て、御願ひ申せし出陣、御聞屆下されなば、武士の本意と、重次郎思ひ込でぞ願ひける、老母は見るより機嫌顔、詞「ナ、珍らしい重次郎、出陣の願ひとな伜を見限り此所へ身退きしに叮嚀な願ひの筋最前嫁女にくはしう聞きました、迚も出陣仕やるなら、祖母が願

ひは此初菊、今宵此家で祝言の、盃仕てから門出しや、何と嫁女嬉しいかと老の詞に初菊は、飛立斗氣もいそ〳〵、心の悦び穂に出る、顔は上氣の夏楓色も媚く斗也、只默然と重次郎、けふ初陣に討死と覺悟極めし此體、お暇乞に參りしと、しらせ給はぬ悲しやと涙呑込忍び泣操の前も立上り、祖母樣の御機嫌のかはらぬ内にかための盃、詞「ナ、それ、孫も大かた心せき探ば九献の用意しや、重次郎が初陣の、鎧の役はすぐ　花嫁、三國一の悲しみと、しらぬ白齒の孫嫁か、手を引連て三人は、奥の一間へ入にけり、殘る蕾の花一つ、水上かねし風情にて、思案投首しはる〻斗、漸〳〵涙押とめ、詞「母樣にもば〻樣にも是今生の暇乞、此身の願ひ叶ふたれば、思ひ置事更になし、十八年が其間御恩は海山かへがたし、討死するは武士の習ひと思し召分けられて、先立不孝い赦してたべ、詞「二つには又初菊殿、まだ祝言の盃をせぬが互の身の仕合せ、わしが事は思ひ切、他家へ緣付して下され、討死と聞ならばさこそ歎かん不便やと、孝と戀との思ひの侮、肩つ一間に初菊が、立聞涙轉び出わつと斗に、泣出せば、はつと驚き口に手を當、詞「ア、コレ〳〵聲が高い初菊殿、扨は樣子を、アイ殘らず聞ておりました、夫の討死遊ばすを妻がしらいで何とせう、二世も三世も女夫ぢやと思ふてゐるに情ない盃せぬが仕合せとは、餘り聞へぬ光慶ひ、祝言さへも濟ぬ内討死とは曲がない、わしや何ぼうでも殺しはせね、思ひ留つて給はれと縋り歎けば、詞「ア、コレこなたも武士の娘じやないか、重次郎が死は兼ての覺悟ば〻樣に泣顔見せ、もし悟られたら未來永々緣切ぞやエ、ナンとかふ云ふ内も時刻が延る、其鎧櫃爰へ、〳〵、アイ〳〵早ふ、時延る程不覺の元、聞分けないと呵られて、いとしい夫が討死の、首途の物の具付るのがどふ急かるゝ物ゐいのと、泣〳〵取出す緋威の、鎧の袖にふりかゝる、雨か涙の母親は白木に土器白髮のば〻、長柄の銚子蝶花がた首途を祝ふのし昆布結ぶは、親と小手脚當、六具かたむる三々九度、此世の緣やわり小ざね、猪首に着なす鍬形の、あたりまばゆき出立は、爽おりし、其骨柄、詞「ナ、適武者ぶり

いさましゝ、高名手柄を見る樣な、祝言と出陣をいつしよの盃、サア〳〵早ふ目出たい〳〵嫁御寮と、悦ぶ程猶彌増名殘こんな殿御を持ながら是が別れの盃かと悲しさ隠す笑ひ顔隨分お手柄高名して、せめて今宵は凱陣をと、跡は得いはずくいしばる、胸は八千代の玉椿、ちりてはかなき心根を、察しやつたる重次郎包む涙の忍びの緒、しぼり、かねたる斗也、哀を、爰に、吹送る、風が持くる攻太鼓、氣を取りなをしつゝ立上り、詞「いづれもさらばと云捨て、思ひ切たる鎧の袖行方しらず成にけり、ハヽ悲しやと泣入る初菊、母も操も顔見合せ、詞「ばゝ樣嫁女可愛やあつたら武士を、むざ〳〵殺しにやりました、ハヽ初菊、重次郎が討死の出陣とは知ながら、なま中留て主殺しの憂死耻をさらそふより、健氣な討死させん爲、祝言によそへて盃をさしたのは、瞋乞やら二つには心殘りのないやうと思ひ餘つた三々九度ばゝが心のせつなさを推量仕やと斗にて、始て明す老母の節義、聞く初菊も母親も一度にどふと、伏まろび前後不覺に泣さ叫ぶ、襟押明け何氣なふつか〳〵出る以前の旅僧、詞「コレ〳〵かみ樣、風呂の湯がわきました、どなたぞお入りなされませと、いふにこなたは泣顔かくし、詞「ナヽそれは御苦勞ながら年寄りに新湯は毒、跡は若い女子共、ヤアお先へ御出家から、いかさま湯の辭義は水とやら、左樣ならば御遠慮なし、れ先へ參ると立上れば、三人は涙押包奥の佛間と湯殿口入や、月もる片庇爰にかり取る眞柴垣、夕顔棚のこなたより、顯れ出たる武智光秀必定久吉此内に忍び居るこそ究竟一、只一討と氣は張弓、心はやたけ藪垣の見越の竹を引そぎ鎗小田の蛙の啼音をばとゞめて敵に悟られじと、差足抜足窺ひ寄、聞もる物音心得たりと突込手練の鎗先に、わつと玉ぎる女の泣聲、合點行ずと引出す手負、眞柴にあらで眞實の、母のさつきが七轉八倒、詞「ヤアこは母人か死なしたり、殘念至極と斗にて、道の武智も仰天し只忙然たる斗也、聲聞付けてかけ出る操初菊諸共に、ハヽ母樣か情けない、此有樣は何事と縋り歎けば目を見開き、詞「歎くまい〳〵、内大臣春長といふ、主君を害せし武智が一類、斯成

り果るは理の當然、系圖正しき我家を逆賊非道の名を穢す、不孝者共惡人共、譬がたなき人非人、不義の富貴は浮べる雲、主君を討て高名顔、天子將軍に成た迚、野末の小家の非人にも、おとりしとはしらざるか、主に背かず親につかへ、仁義忠孝の道さへ立ば、もつそう飯の切米も、百萬石にまさるぞや、儕が心只一つで、しるしは目前是を見よ、武士の命を斷及も多いに此樣な、引そぎ竹の猪突鎗、主を殺した天罰の報ひは親にも此通り

と、鎗の穂先に手をかけてゑぐりくるしむ氣丈の手負、妻は涙にむせ返り、

詞「コレ見たまへ光秀殿、軍の首途にくれ〳〵もお諫め申た其時に、思ひ留つて給はらば、斯した歎きは有まいに、しらぬ事とは云ながら現在母御を手にかけて、殺すといふは何事ぞ、せめて母御の御最期に善心に立歸ると、たつた一言聞かしてたべ、拜むはいのと手を合し、いさめつ泣つ一筋に夫を思ふ恨泣、操の鏡くもりなき涙に誠あらはせり、光秀は聲あら〳〵げ、詞「ヤアちよこざいな諫言立、無益の舌の根動かすな、意恨を重ぬる尾田春長、勿論三代相恩の主君でなく、我諫を用ひずして神社佛閣を破却し、惡逆日日に增長すれば、武門のならひ天下の爲、討取たるは我器量武王は殷の紂王を討、北條義時は尊を流し奉る、和漢倶に無道の君をしひするは、民を安むる英傑の志女童のしる事ならず、すさりおらふと光秀が、一心變せぬ勇氣の眼色、取付島もなかりけり、折しも聞ゆる陣太鼓、耳をつらぬく金鼓の響きあはやと見やる表口、數ケ所の手疵に血ゝ瀧津瀨、刀を杖によろほひ〳〵、立歸つたる武智が一子、庭先に大息つき、詞「親人是におはするやと、いふも苦しき斷末魔、見るに驚く母親より、娘は傍に走り寄りのふいたはしや重次郎樣、ばゝ樣といひお前迄此有樣は情ない、お心慥に持てたべやいの〳〵と取り付て介抱如在泣斗光秀わざと聲あらゝげ、詞「ヤア不覺なり重次郎、仔細は何と、樣子はいかに、具に語れと呼はれば、はつと心を取直し、詞「親人の差圖に任せ手勢すぐつて三千餘騎、濱手の方に陣所をかため、今や歸國と相待所に、敵はそれ共白浪の、櫓を押切て陸地に漕付

詞「追々都へ馳登る、眞柴の軍勢ござんなれと、関をつくつて味方の軍兵縦横無盡になぎ立れば、不意を打れて敵は廢亡狼狽騒ぐを追立追詰、爰をせんどゝ戰ふ内、後の方より大音上、眞柴筑前守久吉の家臣加藤正清是に有逆賊武智が小わつぱ共、目に物見せてくれんずと、いふより早く太刀拔かざし、四角八面に切り立られ、瞬間に味方の軍卒、殘らず討死仕り、無念あからも只一騎立歸つて候と、息繼あへず物語れば、光秀怒りの髪逆立、詞「ヤア言がひなき味方のやつ原、シテ四王天田島ノ頭は、さん候四王天は、目ざすは久吉一人と昨朝よりの一騎がけ、亂軍なたば、生死の程も、慥にそれと承はらず、親人の御身の上心にかゝり候故、未練にも敵を切拔、是迄落延歸りしぞや、此所に御座有ては危ふし〳〵、一時も早く本國へ、引取給へッ早く、〳〵と、深手に屈せず爺親を、氣遣ふ孫の孝行心、聞に者母はせき兼て、アレあれを聞きや嫁女、詞「其身の手疵は苦にもせず、極悪人の悴めを、大事に思ふ孫が孝心、ヤイ光秀、子は不便にないか、可愛とは思はぬかやい、儕が心只一つぞ、いとし可愛の初孫を忠と義心に健氣なる、討死でもさす事か、逆賊不道の名を穢し、殺すい何の因果ぞせぐりくるしき老の身の、聲聞付て重次郎、詞「ヤアそんならばゝ樣には、御生害遊ばしたか、今生のお暇乞、今一度お顔が見たけれど、もふ目が見へぬ父上、母樣初菊殿名殘惜やと手を取て、妹背の別れ愛着の道に引るゝいぢらしさ、母は涙に正体なく、討死するも武士のならひといへど情ない、詞「十八年の春秋を刃の中に人となるいつ樂しみの隙もなふ弓矢の道に日をゆだね今朝の首途の其時にも母樣けふの初陣に、適高名手柄して、父上やばゝ樣に譽らるゝのが樂しみと、につこと笑ふた其顔がわしや幻にちら付て得忘れぬとくどき立、くどき立つれば初菊も、ほんに思へば此身程はかない者が世に有ふか、とけてあふ夜のきぬ〳〵も永き名殘の云號二世を結ぶの枕さへかはす間もなふ此樣な、悲しい別れをする事はどうした罪か情ない、わたしも一所に殺してたべ死たいわいなと身をもだへ、互に手に手を取りかはし名殘

涙の暇乞、見るに目もくれ心きへ母も老母も聲を上わつと斗に取亂せば、道理無氣の光秀も親の慈悲心子故の闇、輪廻の紐にしめ付けられてたへ兼てはら〳〵〳〵雨か涙の汐境浪立ち騒ぐ如くなり、又も聞もる人馬の物音、矢叫びの聲、喧く手に取如く聞もれば、光秀聞よりつゝ立上り、詞「アノ物音は敵か味方か、勝利いかにと庭先の、すね木の松が枝踏しめ〳〵よぢ登り、眼下の村手を屹度見下し、詞「和田の御崎の弓手より追々つゞく數多の兵船、間近く立たる魚鱗の備へ、千生瓢の馬印は、疑もなき眞柴久吉、風をくちつて此家を逃延、手勢引ぐし光秀を討取術と覺へたりと、いふより早くひらりと飛下り、草履掴みの猿面冠者、いで一ひしぎと身繕ひ、勢ひ込でかけ出せば、詞「サア〳〵武智光秀暫く待、眞柴筑前守久吉對面せんと呼はつて、三衣にかはる陣羽織、小手脇當も優美の骨拵もうせんとして立出れば、光秀見るより仰天し、かけ戻つてはつたとにらみ、詞「ヤア珍らしゝ眞柴久吉、武智十兵衛光秀が、此世の引導渡してくれん、觀念せよと、詰寄る光秀、中を隔つる老鳥の、子故に手疵屈せぬ老女、なふ久吉様　詞　我子にかはる此母も、天命遁れぬ引そぎ鎗、作りし罪の万分一亡ぶる事も有ふかと、思ひ餘た此最期。武智が母は逆臣に、かゝつて無慚の死を遂しと、末世の記錄に殘してたべ、それもやつぱり伴めが、可愛さ故の罪亡し、詞「うるさの婆婆に殘らんより、孫といつしよに死出三途、ハテわたしもお供致しまする、いづれもさらば、おさらばと、未練殘さぬ武士の、花も實も有る此世の別れ、今ぞはかなく成にけり、操の前も初菊もさらに詞も出ばこそあへ亡骸を押動かし、天にあこがれ地に伏て歎く心ぞいぢらしき、哀を餘所に眞柴久吉、光秀に打向ひ、詞「倶に天を戴かぬ亡君の弔ひ軍、今此所で討取ては義有て勇を失ふ道理、諸國の武士に久吉が軍功をしらさん爲、時日を移さず山崎にて、勝負の雌雄を決すべしがいかに、〳〵、ホゝ、道の久吉よくいふたり、我も惟任將軍と勅許を請し身の本懷、一先都に立歸り京落中の者共へ、地子を赦すも母への追善互の運は天王山洞が峠に陣所を搆へ、

只一戰にかけ崩さん、首を洗つて觀念せよ、ホヽ何さ〳〵、たとへ項羽が勇有共我又孫呉が秘術をふるひ、千變萬化にかけ惱まし、勝閧上るは暫く内と久吉が詞はゆるがぬ大磐石忽廻り小栗栖の、土に哀を殘すとはしらずしられぬ敵味方、にらみ別るゝ二人の勇者、二世とかための別れの涙かゝれとてしもうば玉の、其黒髪をあへなくも、切拂ふたる尼が崎ぼだいの種と夕顔の軒にさらめく千生瓢簞、駒の嘶迎ひの軍卒、見渡す沖は中國より追々入來る數萬の兵船、威風りん〳〵りんせんたる眞柴が武名假名書にうつす繪本の太功記と末の、世までも「殘しけり

○六月十一日の段

詞「家來共やい、彌明日は山崎にて晴軍、時に扳目ないは久吉殿、敵方の間者又怪しき曲者も有んかと、此赤山與三兵衛へ密々の申付け汝らもぬかりなく、若や怪しき者も有らば、男女に限らずからめ取つて本陣へさし出せよ、褒美は急度後日に御沙汰、必ずぬかるな合點かと、示し合せて主從は左右へこそは別れ行、身は世を忍ぶ、蓑笠にやつす姿も柵が、夫の詞守り立てし、主君の種の音壽丸、いたはり傅き參らせて心ならずも夜の道、流れに、傳ふ淀堤、並木のかげに立ち休らひ、詞「ノヤ和子、遙の西に旗の手の月に映じてさらめくは、山崎の御本陣、父上の御座所、わらはが夫政道殿も主君の御供、翌は早々光秀樣に御對面お嬉しうござりますかへ、詞「ナヽ嬉しい〳〵、早ふれと〻樣に逢いたいけれども、どふやらねむたい〳〵と詞の内に、ふら〳〵眠り、詞「ナヽ道理でござります、大切の密事を受けた俄の旅立、若や敵の間者に出合、御身の御難義有りもやせんと、心は千〻に誰有ふ、江州丹州両國の御主、今では四海の御大將惟任將軍の、御公達、あまたの從者引かへて從ふ者は此柵杖柱とも思し召、御心根がおいとうしい是といふのも父上の道に背きし御企、たとへ望みは叶ふても、勿体ない御主君の、春長樣に刃を合はし、主殺しの大罪と、世の口の端に情ない、夫に連れたる我夫も俱に汚名を下すかと、思へば悲しい〳〵と人目なければ

聲上げて、わつと斗に伏沈む心ぞ、思ひやられたり、立戻りたる赤山が夫と見より相圖の呼子、友呼千鳥はら〳〵と、顯はれ出し以前の組子、詞「女めやらぬと追取卷く驚きながら遁の柵、音壽を圍ふてすつくと立ち、詞「サア心得ぬ人〳〵の擧動、何者成るぞと咎むれば、赤山は大口明き「サア何者とい舌長し主殺しの光秀が一子、音壽丸、軍の幸先久吉公へ差出す、早く渡せと、のゝしつたり、ホヽ、事かおしや、光秀公のお内にて、人も知つたる松田水郎左衛門が女房柵、主なしの久吉殿、夫れに隨ふそち達が、及ばぬ事をと言はせも立てずッレ者共と赤山が下知に從ひ一度に切てかゝるを事ともせず右と左りになぎ立つれば、口程にもなき雜人原むら〳〵ぱつと逃散つたり透を窺ひ後ろより、切込む赤山早足の柵、ひらりとかはせば赤山が、首は前にぞ落にけり、詞「サア〳〵此隙に音壽樣、此場を早ふと、かい〳〵敷く忠義一途の女氣に、主君の若を伴ひて、定めなく〳〵短夜に、心せかれて「たどり行

と居尺高、イヤモいかやうに陳ずるとも、死色を顯はす汝が骨格、我に討れん心の覺悟、死人と云しが誤りかと、明察遥はぬ一言は、胸に磐石現とも、心はやみの柵が、聲も涙にかきくもり、兄樣のあの心ならどの樣に思はしやんしても、所詮死れるお前の命、どふぞ死なずに濟む事あら、千年も萬年も長生して、二人の中の、「サア二人が中に預かつた、主人のお種音壽樣の行末も御無事な樣に思案して下さりませコレ申、夫婦と成て以來に願ひといふは是一つ聞屆けてたべ我夫と、妹が歎き遁にも血脈の糸の亂れ口、涙呑込む義晴が心の内ぞせつなけれ、何思ひけん太郎左衛門鎧ぬぎ捨どつかと座し、詞「實や名將の下に弱兵おしと、遁眼力森尾義晴、主家の無道を見限りて、死出三途の先陣と覺悟極めし心は鐵石、死後に頼むは此女、又是迄音信せざれ共、實父松田利休殿へ、預置たる彼若殿、心を添てよき樣に、頼み置は貴殿一人、最早浮世に望なし急ぎ首討我存心、立さしくるゝも武士の情、猶豫は返つて恨むぞと、言より早く持たる刀腹にがばと突立れば

登る、嶮岨も力草、足踏しめて難なくも、こなたの岡によぢ登り、夫と見るより分け入て、ヤア〳〵待ても身を惜まず、さゝやる女房突きのけて猶も付け入る太郎左衛門、互いに劣らぬ勇將猛將中にうろ〳〵、詮方もなぎさの小舟柵が、浪に漂ふ其風情、心も功に有合槓、切結びたる白刃のしづ、しつかとゝゞめ、詞「ヤア〳〵待て下さんせ、コレ兄様茂介殿必ず早まつて下さんすな元より知た敵味方、討ちうたるゝは武士の身の、常とは知て居ますれど、相手も多いに姫同士、切つはつゝの爭ひを、何と見捨てゝ置れふぞ、思ひとまつて〳〵と、歎きかこつを耳にもかけず、詞「ヤア義晴何を猶豫内證の縁は縁親子兄弟、敵ふと鎬を削るは武門の常、早く勝負を決せよと、云せも果ずにつこと笑ひ、詞「死人同前の政道我相手には不足あり、光秀が先途を見届け死る共遲かるまじ、妹がとむるを幸、此場を早く退けと聞よりはつとせき立、詞「ヤア奇怪なる一言、弓矢取ては誰に恥べき事や有らん、女房が兄とは云さぬ、首討取て修羅の奴となしくれんに、死人同前とは案外なり

森尾茂助春久に候よし、元より討死の覺悟に候へば、我等が首は春久へ遣はし候、なれ共妹の縁につれ、用捨も候はゞ武門の中恥べき事に候へば是非なく暇遣いし候段、必ず恨有るまじく候と、讀もをはらず立上り、詞「こりや斯しては居られぬわいのふ、夫の最期は此曉、若殿の御身の上奥へ踏込取返さふかイヤ〳〵あれ〳〵あの鐘は八つの鐘、天王山へは一里の餘、夫の命も助けたしこりやヤアどふせう〳〵と、主と夫の身の上を我身一人に柵が立たり居たり詮方も、涙ながらに氣を取直し、詞「何にもせよ是より直に天王山へかけ付けて夫に一言そうじや〳〵と、滯引しめ常には弱き女氣も夫に立る貞心の、くもらぬ鏡てる月に、照す道筋一さんにてけつまろびつ「したひ行、山は血沙のから紅ひ敵も味方も入亂れ、戰ひいどむ其中に、森尾松田が雌雄の爭ひ、人ませもせずはつし〳〵、切結びたる電光の、刃の光り飛鳥のごとく鎬を削る其折りしも夫の生死いかゞぞと、氣ハはり弓毘女房柵武家の育のかい〳〵敷、夫を思ふ一心に、木の根岩角厭ひなく、

ます事は成りませぬ、申若殿様、いざゝせ給へと立寄るを突退け〳〵音壽丸小脇に引抱きはつたとにらみ、詞「ヤア龍の胴にかゝりし小伜、連歸らんとは叶はぬ事、わるく妨げひろぐやいなや身の爲にならぬがや、ヲ、元より夫に去られし此身、生て詮なき我命、ちつ共厭はぬ〳〵と、又立かゝるを面倒なとしんの當うんと倒るゝ其隙に奥の間さしてかけ入つたり、跡には一人柵が苦痛こたへてれき直り、詞「チヽ、胴欲ともむごい共何に譬へん勇君何辨へも七つ子のお首を敵に渡さふとは、心は鬼か蛇かいのふ、たとへ此身はひし〳〵はに成る迚も、取かへさいで置べきかと、心を配る椽先に落ちる一書ゝ夫の手跡、詞「柵殿へ光高より、スリヤ最前の文の中に封じ込たる此一書心ならずと封押切、詞「書殘す一書の事、ヤア〳〵そんなら夫太郎左衛門殿は討死の覺悟で有つたか、ハテ何にもせよと又取上けナニ〳〵今度の合戰主君光秀公主殺しといふ惡名、其罪遁るゝ事有るまじく覺へ候故其方を頼み親人へ若殿の義くれ〳〵相頼む事に候、又ゝ明朝の戰ひに向ひ候敵はそちが兄しくれよとの願ひ書又柵事は敵がた森尾茂助が妹に候へば是も親が手より返し遣はしくれよと有伜が文面と聞て悔り柵は膝摺寄て、詞「ムヽスリヤ主君の若殿お預け申さん其爲にお詫の使ひ一つにはわたしが身の上兄様へ返してくれとは何の事、さういふ事とは露しらず勇御様へお詫して、嫁よどうせい斯せいのお詞受て歸りなば、夫の悦び此身の手柄と悦んでゐる物を科もない身を去らふとは、聞へぬ夫の心やと、くどき歎くぞ道理也、詞「ハテ扨何も歎くにや及ばぬ此宗左衛門も元は武士、亂れたる世を遁れ、心を澄す茶道の樂しみ、折ゝは久吉殿の招きに預り咄しの伽、弓も引きかた眞柴へ心通ハす某、大惡無道の光秀が種と有ば願ふてもないよき得物首打放し久吉公へ献ずるならば嘸悦び、ハテ飛で火に入夏の虫とは是ならんと、勇の一言柵が聞とり又も二度恟り、詞「ほんに〳〵親子とて餘り情しらず獵人さへ懷へ入る鳥は助ける物たとへ此身は去られても、夫に立る心の潔白女でこそ有松田が女房、主人の若殿めつたにお首は得渡さぬ、斯いふ内に片時も置き

向後物は言んすく、早く奥へお行きやれと、常の氣質のぢやかごには、詞はなくてしほ〳〵と、心「殘して立て入、柵は氣の毒の中に願ひも言ひ兼て俄に作る輕薄笑ひ、詞「ホヽヽほんにまあよしない事から御夫婦のおいさかいもふお腹立は重々の御尤じやがどふぞ夫の願ひ、則此子は主人と仰ぐ光秀公の御公達音壽丸様、夫に付ての御訴訟と何か様子は白紙に書き認めし願ひの一書、輿の前にさし置けば道骨肉同胞の我子の手跡としぶ〳〵ながら手に取り上げて押開けば、様子いかゞと氣遣ふ嫁、鼻は猶も眉をひそめつぶ〳〵讀も口の中、卷納めてにつこと笑ひ、詞「何事ならんと思ひしに、少し計りは侍くさい所も有る出かす〳〵、そんなら夫のお願ひと申ますは、成程大切の密事、其方はしるまい〳〵、伴が我への願ひといふはコレ此小兒光秀此度當山崎にれいて合戰のいどむといへ共無名の軍、元より主殺しといふ大罪、天何ぞ是を赦さん然らば十が九つ負軍と押はかつたる伴太郎、去るによつて光秀が一子音壽丸、我に養育を頼み、成長の後は出家ともならぬ、成程〳〵委細の譯を申さねばさう思し召すも理りながら、私事は十三の時家出致されました、御子息宗太郎殿の女房柵と申者、夫も今れつきとした侍、名も改て松田太郎左衛門と申まして夫れは〳〵適の武士、どうぞ是迄の事は川へ流し、元の親子に、ヤヽそりや云しやらいでも知れた事元より氣に違ふて家出したと云ふでもなし、生れ付て力强、草深い住居を嫌ひ、我と我手に家出した宗太郎、わしは明暮こがれて居ます、そして連てわせたは夫婦の中に出來た子か、ヤヽこちへと嬉しさの、子には目のない母親が、悦ぶ中へ宗左衛門、刀片手にあもみ出、詞「お祖母何をべり〳〵おいやるぞ親を見捨た不孝の伴夫に連添ふ此女郎嫁なんぞとは穢らはしい早立ち歸れとつかふどに、いふをおさへて、詞「ヤヽコレ夫は一途な思ひやう、毎日〳〵壁訴訟、願ひの折も幸と、初めて逢た嫁の手前、どふぞ了簡し中直りして下されと、いふも涙の種あらん、詞「ヱヽ、又しても〳〵役に立ぬ伴が訴訟聞きたくないぞ、よい年をして女房去るも世間の笑ひ、暇の代りぢや

○六月十二日の段

誰を乞、鳴や柄に、から衣はつてふ蟬の音を友と、世をいとふたる浪人の風雅を好む一かまへ、谷の流れも水無月の空半なる夕暮時遠寺の鐘のかう〳〵と、兼ての願ひ有り磯海、深き思ひに柵が縁によるべの勇の住家そこ爰とたどりくる〳〵長暇稚子連て夜の道、漸尋ねあたりにも、家居なければ爰ならんと柴の軒端に佇みて、詞「イヤのう音壽様、夫松田太郎左衛門殿の差圖を請て來事は來ても、つゐに是迄音信もせぬ親御の所、どふやら敷居が高ふなり、閃にくう思ひますと、いへば音壽が打點頭、詞「そなたが得閃らずばおれから先へ閃つてやらふと、何のくわん也も上り口、ア、コレ申しをしはにして、閃る物音何やらんと、納戸を出る妻の眞弓、顔見合して柵が手をもぢ〳〵と、詞「ホ、〻ほんに私とした事が、いかに勇君の所ぢや迚、案内をしに不作法千萬、お赦なされて下さりませと、いへどこなたは不審顔詞「夜に入て若い女中の子供をつれ、勇の所へ來たとは、此母は覺へはござのふ悲〻やと取縋り、歎く女房を取て引すへ、詞「サテ森尾、名もなき士卒の手にかけんより、武士の情に我首を、受取くれよとさし付れば、ハ、世の有様とは言ながら、かばかり惜き弓取も、主家の惡事は其身の不幸、殘念至極と義晴が、是非も涙に立迫れば、ヤテ愚〳〵、死にのぞむは勇者の本義、骸は廣野にさらす共、名は千歳にとゞまるこそ、死しての悦び此上なし早く、〳〵と稱名の、聲は此世の別れかと、身をもむ妻を動かさず、膝に引敷强氣の手負、義晴いざと潔き、勇者の最期あへなくも首は前に落にけり、わつと計りに柵は、其儘死がいにいだき付聲も惜まず泣叫ぶ、心を察し諸袖をしぼるも血脉恩愛の涙にかはりける、義晴は涙を拂ひ、詞「ヤア〳〵妹、歎いて返らぬ松田が最期、遺言守るは音壽が身の上又此首はそは持歸り、佛事もよきにと詞の中、麓の方にゑい〳〵聲、ひゞきなびける両陣の、入亂れたる鬨の聲、身にぞこたゆる柵が涙ながらに亡夫の、しるしの筐上帶に、包むも涙雨やさめ、ふり行末の末迄も、思ひ、つゞけし敵味

方、兄の忠臣妹が、貞心くもり泣ふも麓の、方へ「たどり行く、短夜の、風吹拂ふ庭の面隈なき月も哀そへ、涙の露かいたいけに、無慚なるかや稚子の、目は泣はらし、袖摺の、其松が枝に、からまるゝ、妻の眞弓はさし寄て、詞「ノヤ利休殿尤武智光秀といふ逆賊の子とは云ひながら、我子の爲にはお主の若殿、手にかけふとは胴欲な、どふぞお命助ける樣、思案仕かへて下さりませといへ共、更にこたへなく、れのが好める淹茶の手前、稚子は座をしめて、詞「おりや侍の子じやによつて何ともない、早ふ殺して下されと、云放したる健氣さを、聞に眞弓はたへ兼て、詞「ア、道は武士の育から、聞分けよい程なは不使な、コレいぢらしうはござらぬか敵と味方と分登る道は二つにかはれ共、同じ雲井に、照月の分隔なき恩愛と、情の道を辨へてどうぞ命を助るやう、思案してたべ我夫と、詞を盡し理をせめて涙ながらに泣詫る、山手は修羅の責皷時しも遊に衒して、松田太郎左衛門政道を森尾義晴討取たりと、聞より思はずすつくと立、スリヤ悴宗太郎は早討死を遂しとか此上は生け置て詮なき音壽、此世の暇取らせんと、はぞくいましめ悅んで手そゝぶりする有樣を、見るに心は弱れ共、四海の怨敵根を斷て枯す枝葉と拔放すのふいたはしやとさゝる眞弓、寄るを寄せじと引戻し、爭ふ折しも柵が脊に夫の切首を結ぶ妹脊の別れ道、脛もあらはにかけ戻り、此体見るより稚子を後に圍ひて待てと、言せも立てず聲荒らげ、詞「サア此期に及び聞く事ない、悴討死せし上は天王山を取切られ、光秀が敗軍も目下妨げせずとそこ退けと、尖き刀振りかざす、其手に取付き聲震はし、詞「コレ親父殿、慈悲も情も辨へながら初て逢た嫁の思はく、生としいける身ではなし、先立老木若木の蕾どうぞ助けて進せてと、涙に誠姑が、情の詞身にあまり有がた涙柵が、夫の首を抱き上げなき我夫も諸共に命のお詫とさし付られ、道剛氣の利休も、親子の輪廻に引されて、たるむ心を取直し、じり〳〵と付廻す、地獄の呵責三惡道、シヤ面倒なと突退蹴退、エイと一聲稚首水もたまらず打落せば、二人はわつと泣倒れ正体なく伏沈む、詞「主殺し

の大罪報ひも早さ此死ざま、いで久吉の本陣へと、かけ出す裾をとゞむる嫁をはつたと蹴飛しかけ行向ふへあまたの軍卒、高挑灯に威風をてらし、しづ〳〵入り來る眞柴久吉、あたり輝く陣裝束、思ひ寄らぬ宗左衛門遙、しさつて平伏し、コハ存じ寄らざる公の御入來、只今陣所へ推參の所、願ふてもなき對顏と、敬ひ深く相述れば、久吉莞爾と打笑て、詞「逆賊光秀が一子音壽丸、足下扶助致さる由、家臣森尾が密事の注進、急ぎ討手と申も餘り仰々敷、久吉密に向ふたり、いかに〳〵と嚴然たる、詞に猶も恐れ入、詞「ハ、計らず手に入る武智が悴、討取たるは某が信義を忘れぬ兼ての交り、イヤ御改下さるべしと、血汐を清めさし出せば、久吉とくつと實檢有り、詞「父光秀も此如く、やがて討取主君の怨敵、とは云ふ物の稚き者、不便の最期遂たるよな、イヤナニ宗左衛門、云ば小兒の此切首、梟木にさらすにも及ぶまじ、由樣の方へ葬り召され、御邊への恩賞は、風雅を好める別業へ、思ひ寄つたる寸志の一品、それ〳〵者共早是へと、仰の下に雜兵共、庭にどつさり一つの居石、詞「何と宗左見られしか、亡君春長公の御自服とも思されて、お請有らば拙者が悦び、スリヤ其石を某へ、いかにも小袖がはりの小袖石富滿にも、あらぬ眞孤を引かけし、かりの淀の〻、忘られぬかな、チ、さらば、〳〵と一禮し、從者引連れ久吉は本陣さして歸らるゝ、跡見送て宗左衛門はつと吐息も突詰し女心の柵は何思ひけん表の方、駈出す戸口立て切利休さレ待て女、詞「音壽丸が身代りに二人が中の悴を殺し、夫が最期の忠義も立、嘸本望で有ふなと、聞て悔り、詞「ム、そんなら此子を初から、あなたの孫といふ事を、テ、十六年が其間、對面せざる我悴、たとへ幾年經る迚も骨肉分けし此親が、見忘れてよい物か、音壽丸に出立せ、連來りし稚子の面ざし目元鼻筋迄、伜に其儘生寫し、其時孫とは、知たるぞやとは言ながら、現在の祖父が手にかけ一刀の、下に消行不便さを、こらゝる心の四苦八苦、コリヤ推量せよと大聲上げ、取亂したる溜涙、ねふれるごとき死首を、右と左りに打守り、詞「コリヤ悴、久々にてよく來たな、十六年が夢の内、忠孝

全く親子が最期、ア、出かしおつたと一言が、夫子の爲の經陀羅尼と、有がた涙柵が、袖に露置くかこち言、そうしたあなたのお心としらで恨みし不幸の罪、お赦しなされて下さりませ、ア、其詫言は此の母が言ねばならぬ此場の時宜、孫と我子の死ぬるのを、夫と白髮の身の因果、むごい者じやとさげしんで、たもるなやいのと、姑が、詫るも涙聞く涙、詞「ア、勿体ない事れつしやつて下さりますな、嫁と名ばかり是迄に、れ宮仕へもする事か、逆樣事を見せまする、不孝の罪が恐ろしい、とはいふ物のあぢきない、二世と契りし我夫の、最期の場所に居ながらもとめる事さへ情ない、いとし可愛の千石迄人も多いに祖父樣の、お手にかけふと親の身で連て來とは何事ぞと、歎けば道利休も、恩愛死別のうき涙二つの首を見つ見せつ、取り亂したる三人が、涙の雨に水かさのいとゞ增りて淀川の、堤も崩るゝごとくなり、利休漸涙をおさへ、詞「忤が忠義を立てさせんと信義を失ふ我計ひ天地を見拔く久吉殿、賜も有べきに、小袖にかへて遣はすと心得ぬ庭の居石、其上猶も不審あるは、金葉集に乘せられし相摸が詠歌に菖蒲にも、あらぬ眞菰を引かけしと、引きぞ煩ふ頼政が深意を取れば千石が、最期を花によそへし謎、忤が小袖千石と、心と迄めし我への賜、今こそ思ひ當つたりと、悟るも道久吉の、名智を感ずる計なり、柵は膝すり寄、詞「スリヤ身がはりといふ事を、そんなら孫の千石が、身代りに立たのも、水の泡になりますかいのふ、ヤア愚〳〵、敵を惠む寛仁大度、猶も願ひを立んと思はゝ、此利休が皺腹一つ、必ず留なと指添を、既に拔かんとする所、取付き歎きとゞむる二人、放せ〳〵と爭ひの、折もこそ有れ一間より、詞「ヤア〳〵松田宗左衞門利休殿、狼狽ての犬死なるか早まれなと、聲をかけ、障子をさつと眞柴久吉しづ〳〵と立出れば、思ひ寄らねど騷がぬ利休、詞「ヤア犬死とは事おかしや、誠眞の失せし某が既に報ふ此切腹、道は老体斯も有んと察せし故、陣所へ歸る体に見せ、とくより忍び窺ひ聞く、西國の探題たる眞柴久吉、實檢遂し光秀が一子、天地廣しといへ共今一人と有るべきか主君を

弑せし武智光秀、夫に引かへ子息政道、討死、遂しは、適勇者、せめては死したる人〻の菩提の爲めに此所へ、庵を結び利休殿、詞「好める道の茶を以て往來の人に施さば、死ぬるに增さる節義ならんと情の一句は則悟道、死をとゝまりて松田利休、詞「ハ、惠も厚き御仰、教への心ハ則菩提心の濁り墨染の衣がはりはコレ此居士衣、くもりを拂ふ誓ひぞと髻ふつゝと押し切て詞「姿心もかはる世に我は茶道の道廣く、孫が其名の一字を取、利休を其儘に千の利休と改名し、浮世の塵に交はる共只本覺の佛性たらん、詞「ホ、〻、天性傳はる千の利休、今よりは久吉が則ち茶道の師と頼まんと、約束堅き小袖石、庭に哀い稚子の、涙の種か袖すり松古跡となりて末の代に、殘る其名の因緣は、此時よりとしられたり、かゝゝ折しも眞柴の郎等、庭上に大息つぎ、御注進と呼はれば、ホ、堀本義太夫、味方の勝利は何と〳〵、ハア仰の如く備を立、両陣互に鏑を削り、爰をせんどゝ戰ふ中、敵の勇將蟹江才藏、陣頭に踊り出、詞「味方の諸軍を手玉の如く打付け、投付け駈廻る、其勢ひにおぢ恐れ、少したもみて見へたる所に、詞「福島の陣中より、至て小兵の桂市兵衛、斯と見るより飛かゝり、互に組合金剛力者、六尺もたかの才藏を難なく生捕古今の手柄、勝色見する間もなく、川を隔し筒井順慶、時分はよしと光秀が陣所を目がけて無二無三、一手に成て責かくれば、敵は廢忙狼狽騷ぎ、崩れ立たる其虛に乘て、追立ほつ詰責付れば、是迄也と光秀も馬を飛して只一騎、小栗栖さして落延しを追ふかけ行味方の勝利、御歸陣有て然るべしと、悅び勇み訴ふれば、詞「ヤ、潔し〳〵、イザ小栗栖へ後詰せん、旁用意と久吉の、詞にはつと迎ひの軍兵いざ御歸陣と引居る、駒にゆらりと法の緣、結ぶ一世と二世の緣、切て捨たる亡魂の、しるしを直に野邊送り、又思ひ出す、女氣に涙の袖や鎧の袖、旭に映じきら〳〵綺羅一天に苅取る眞柴、仁德なりや風雅の德、忠孝全き其德を世々に、傳へて「美嘆せり

○六月十三の段

神力勇者に勝ずといへ共、天遂に是を罰す、されば武智十兵衛光秀筒井順慶裏切によつて山崎の一戰敗れ、漸遁れ小栗栖の藪陰近くさしかゝれば、追〻駈くる眞柴方、ソリヤ落人よ遁すあとおめき叫んで切かゝれば、詞「シヤちよこ才なうぢ虫共、冥途の導きしてくれんと、振かざしたる刃の稻妻瞬く内に先手の軍兵十二三騎、切て落せし勇猛力、叶はぬ赦せと一同に、嵐にさそふ端武者共、むら〳〵ぱつと、逃失たり、相人なければ光秀は太刀のいきりをさまさんと、藪の小かげに手綱をひかへ、傾く運の口惜涙、鎧の袖にはら〳〵、降かゝりたる夕立の空も哀や添ぬらん折ふし藪のこなたよりたゆみ佇む光秀が、鎧の透間を見極めて、ぐつと突込猪突鎗驚きながら切拂ふ、間もなく突出す竹鎗の穂先は風のしの薄、なぎ立突立切拂ひ、暫し時をぞ「うつしける、梢にすだく蟬の經、手向となりし武智光秀、小手定まらぬ竹鎗を、身の毛のごとく刺通され、流るゝ血汐に寡草を花と染なす紅ひの、田畑あせ道刀を杖、よろぼひよろぼふ無慚の有樣、ほつと一息撞出す鐘、寂滅爲樂責太鼓、修羅の迎ひの百姓共、集り寄たる一むら雀又突かゝる上段下段、一世の瀬戸と受流し、爰を、せんどゝ切ふせぐ、手練の鉾先百姓共、叶はぬ赦せと我先に跡をも見ずして逃散たり、遁さじ物とかけ出し、心は矢猛とはやれ共身体勞れどつかと座し、拳貫く無念の齒がみ弱る心を取直し、詞「一元に歸す此世の暇、刀逆手に我腹へ突立引廻す程なく來たる眞柴久吉、萬里に羽うつ大鵬の威勢は旭の登るが如く、優〻然と歩み寄、詞「いかに光秀主を詐たる天罰の報を思知たるかと、太刀拔放し光秀か首をはつしと打落し諸軍に向ひ聲高く、詞「ヤア〻者共、此虚に乘て敵の殘黨左馬助光俊、齋藤内藏助が備へを暫時に攻崩し、名に近江路の湖へ一騎も殘らず追沈めん旁來れと先に立、勇み進んで凱歌の聲、箙をたゝ

絵本太功記

さ凱陣の其悦びを今爰に、うつす勸善懲惡の端ともなれとまさな言書
さ納めたる君が代の、萬ゝ歳の壽きは中ゝ申もおろかなれ

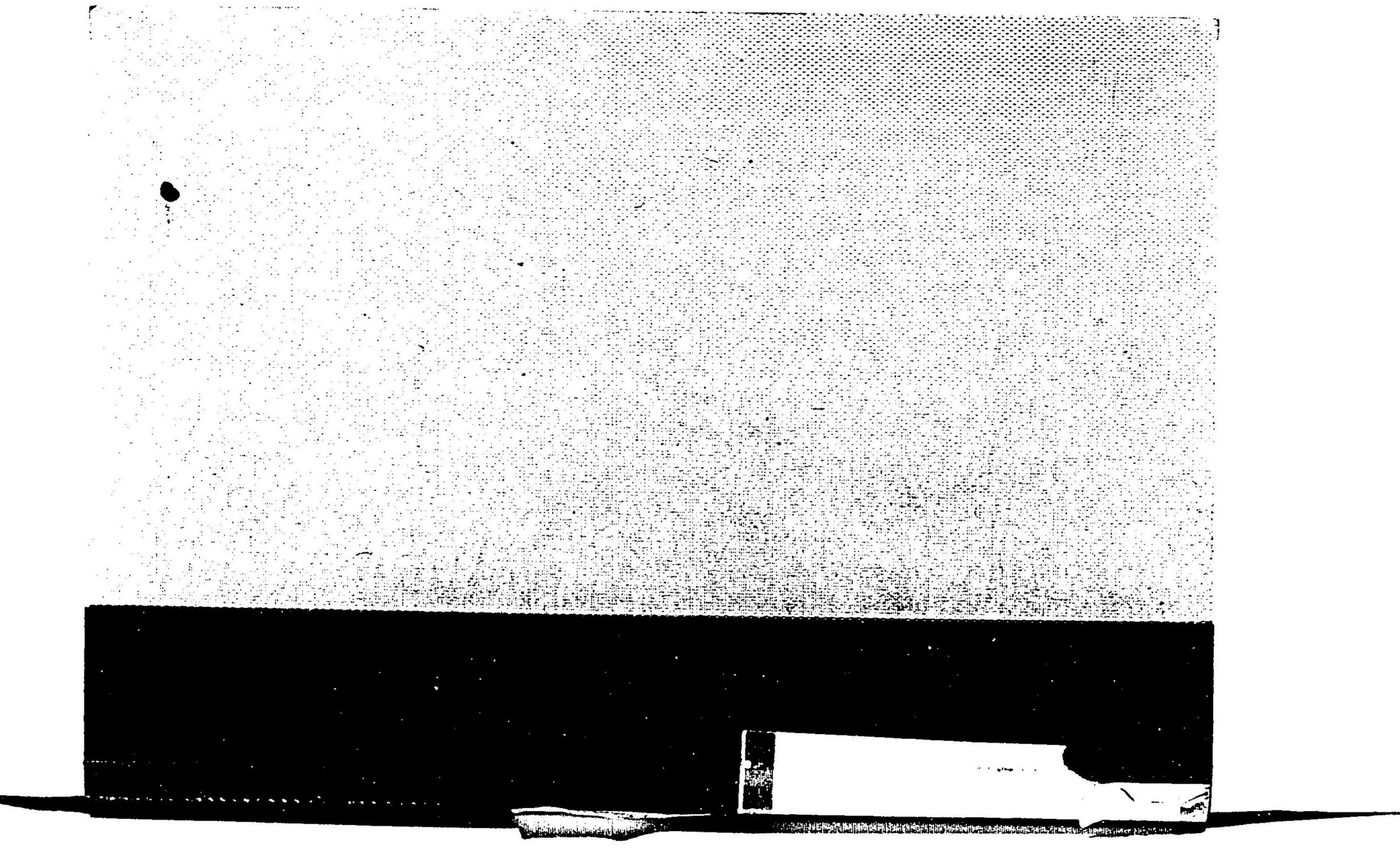
寛政十一年未七月十二日作

明治卅年一月十日印刷
明治卅年一月十五日發行

翻刻兼發行者　大阪市東區今橋四丁目　寺井與三郎

印刷者　西區江戸堀北通三丁目三十三番屋敷　森本喜兵衛

專賣所　全國各書林ニアリ　瓢友館發行



912.4
Ti2383e
禁複写

088195-000-0

912.4-Ti2383e

絵本太功記

近松　やなぎ／等著

M30

DBI-0018